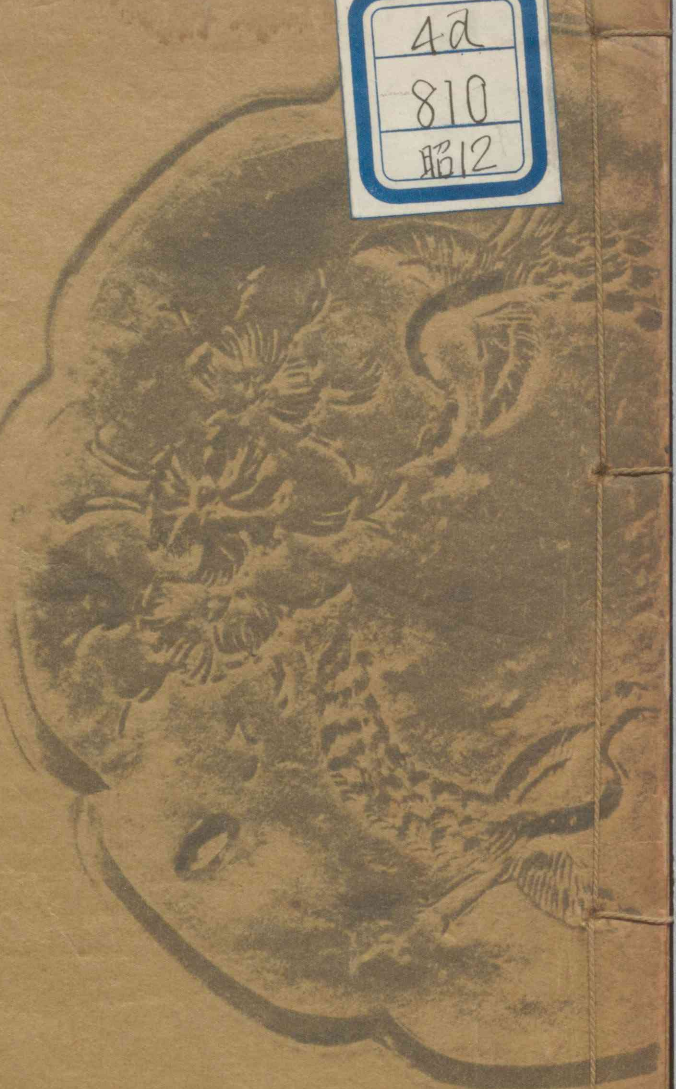
新制 新日本讀本

吉澤義則編

十

4a
810
昭12



41444
教科書文庫
4
810
41－1938
20000
81501

資料室

昭和十三年一月十七日
文部省檢定濟
中學校國語漢文科用・實業學校國語科用

新編日本讀本

文學博士 吉澤義則 編

修文館發行

4ア
810
昭12

（第十五課参照）

柿本人麿像　（藤原千春筆）

広島大学
教
81501
図書

巻十目次

一　明淨直　五十嵐力　一
二　永遠の生命　亘理章三郎　一二
三　秋の力　綱島梁川　一九
四　國語の變遷　編者　二三
五　雅文抄　三二
一　消息文例の序　（鈴屋集）
二　雪のあした友の許に　（鈴屋集）
三　上田秋成の許へ　（琴後集）

四　伴蒿蹊におくる書　（琴後集）
五　水雞笛　（芭蕉書簡集）
六　十訓抄　四〇
七　新島守　（增鏡）　四六
八　日本文學研究の新意義　藤村作　五七
九　法成寺の造營　（榮華物語）　七〇
一〇　須磨の秋風　（源氏物語）　七五
一一　謠ひもの　七八
一　神樂歌
二　催馬樂

三　朗詠
四　今樣
一二　大和國原　武田祐吉　八三
一三　倭建命　（古事記）　九三
一四　歌の響　島木赤彥　九六
一五　畝傍の山　（諸家）　一〇五
一六　藝術の三境地　坪內逍遙　一一〇
一七　社會的意識と國家　西田幾多郎　一二〇
一八　生活の中心　阿部次郞　一二八
一九　國學者の業績　岩城準太郞　一三八

二〇 すめらみくに 一四五

一 萬葉考のはじめにしるせる詞 加茂眞淵

二 直毘靈 本居宣長

三 靈能眞柱 平田篤胤

附錄

上古・中古文學 編者 一五七

―終―

五十嵐力
米澤市の人、明治七年生、文學博士、國文學者、早稻田大學教授。

宣命

新制 新日本讀本 巻十

一 明淨直

五十嵐力

文武天皇が、御即位の際に下された宣命の中に、左の詞がある。

「是を以て百官人等四方の食國を治めまつれと任け給へる國々の宰等に至るまでに天皇が朝廷の敷き給ひ行ひ給へる國の法を過ち犯す事なく明き淨き直き誠の心もちていやすゝみ〳〵て緩怠ることなく務め結りて仕へまつれと詔り給ふ大命を諸〻聞食へと詔る。」

我等は、この宣命にある「明き、淨き、直き心」といふのが、日本人の

⑤

日本書紀 三十卷、神代から持統天皇の御代までの事蹟を漢文で記した歴史書。

抽象的

性質中の核となり、中心となるものであらうと思ふ。この詞は、代々の詔勅に幾度も〳〵繰り返されてゐる。しかも重きを置いて繰り返されてゐる。その他、古事記・日本書紀萬葉集などに於ても、重々しい場合に幾度も用ひられてゐる。これは、畢竟、我等の祖先が心の中に深く感じたこと、大和民族に最も濃厚に最も多量に賦與された性質が、自然に口を衝いて屢、發したのではあるまいか。世に大和民族の特性と稱される現實・光明・活動・向上・中庸・快活・忠孝・淸廉・勇武・義俠・風雅などの諸性質は、概ねこの明・淨・直の三大性質を基本として說明されるらしく、殊に三種の神器が、この三大性質の標章として遺憾なきやうに思はれる。次に、抽象的ではあるが、一通りその理由を說明して見たいと思ふ。

鏡の性は明で、その德は玲瓏透徹に物を映すにある。日本人は、鏡のやうな明き心を以て正しく事物を觀た。故に、その觀方は概して公平無私で、赤い物は赤いとし、黑い物は黑いとし、善行に對しては我を忘れて歎美し、惡行を見ては敢然として排斥するといふ傾があつた。天照大神は「鏡を齋きて、我が大御前を見るが如くせよ」と、仰せられた。全國無數の神社には、その鏡が神體として齋かれてある。詔勅や祝詞や君臣應對の詞などに、「明き心」といふ語が澤山用ひられてゐる。これ等は、何れも、この性質が我が國民の心底に根深く植ゑつけられてた證據であると考へる。我が國民の中庸性・折衷性・調和性も一面この根本性質の結果であらう。我が國には、政治・社會・宗教などの諸方面に亙つて、諸外國に見る樣な非常な大衝

騎虎の勢

陣中篝火の下　島津義久の臣、新納忠元のこと。

敵ぞとて　新納忠元の歌。

突はない。全くないではないが、割合に少なく、またいつもそれが調和する傾がある。例へば、異主義が新に外國から入つて來る。毛色が變はつてゐるので、暫くは新舊相爭ふが、やがて、お互にそれには道理も無理もある事を解すると、馬鹿らしくなつて、最早爭論が續けられなくなる。そこで、騎虎の勢の意地喧嘩は止めにして、長短取捨の調停をする。萬事がこの通りである。僅かあれだけの騷ぎで、明治の維新を見たのも、平和の裡に憲法を得たのも、君臣・父子の親和も、萬世一系の國體も、一面皆「明」といふ基本的國民性の賜ではあるまいか。馬上に天下を得た武將が、文藝の奬勵に骨折るのも、群雄割據の亂世に、陣中篝火の下で古今集を讀む武將のあるのも、同じく戰國時代に「敵ぞとて何かは人の憎からん同じ御國の同じ身

十字軍　ローマ法王ウルバノの提唱により聖地エルサレムを基督教徒の手に恢復する爲の戰爭。(1096—1291)

フランス革命　フランス國に起つた革命戰爭。(1789—1792)

溷濁

なれば」と詠んで、敵を同胞として愛した勇將のあるのも、武士が僧侶に親しみ、僧侶が武士に盡くすのも、乃至さつぱりと腹を切るのも、一は事を見る事が明らかで、理に從ふ事が流れるやうな根本性によるのではあるまいか。大和民族は、十字軍やフランス革命のやうな極端な狂言を演ずるのには、餘りに心が明る過ぎる傾がある。我等は、日本人を公正といひ、理に鋭いといひ、感情の平靜を保つといひ、何事をも受け入れる胸懷の洞然たる人種であるといつた外人の批評は、強ち出鱈目の空世辭ではないと思ふ。

清淨の德は、玉に於て絕好の標章を得てゐる。淨と明とは、似てゐるが同じではない。その違ふ趣は、丁度鏡と玉との違ふ趣に似てゐる。汚穢・溷濁を忌むことは、清・明共に同樣であ

溫潤の光
圓融の相
澄徹の趣

諷詠

るが、淸はそれ以上に味はひのあり溫かみのあることを要する。　譬へば、鏡は空白で正しく物を映ずれば足りるが、玉は必ずしも空白で物を映す事を要しないで、溫潤の光・圓融の相・澄徹の趣のあることを要する樣なものである。　本來日本人は、明らかに事物を看る長所を有するばかりでなく、外物を看るのにも、自己を發表するのにも、一種の味はひのある態度を具へてゐた。　その明は、空白の明ではなくて、溫潤・圓融・澄徹の趣味を加へた明である、硝子の明ではなくて、水晶・夜光珠の明である。　我が國は、古來、禊・祓が多く行はれ、廣く用ひられ、且つ重要視されてゐた。　祝詞・宣命を初めとして、多くの歌詠・諷詠は明き心を現はし乍ら、趣味・風韻に富んでゐる。　而も、その趣味や形容が、諸外國例へば支那の文學に見るが如き、張子の虎の

むくつけし

やうな誇張の弊がなく、よくその實を現はし、中味に相應はしい修飾を纏うてゐる。　むくつけき武人にも、戰陣の間に花を翳し、歌詠を贈答し、或は冑に香を燒きしめるといふやうな嗜みがあつた。　上流社會はいふに及ばず、市井の民に至るまで、一般にそれに相應はしい文學を有つてゐる。　外國出稼の勞働者が、その日の生活に窮しながらも、なほ一二の植木鉢を持たぬはなく、而して、これは外國の勞働者に絕えて見ないところといはれてゐる。　大工・指物屋の手に成るはかない家具や細工物も、西洋のが表面のみ美しく裏面の粗末なのに反し、我が國のは、見えない裏面にまでも手を盡くすといふ嗜みがあるといはれてゐる。　これらは、何れも大和民族が淸きを愛する根本性の現はれたものではあるまいか。　我等は「日本人は

審美眼

首鼠兩端

世界第一の審美眼を有する國民にして、貴族より勞働者に至る迄、皆美術を愛翫す」といふた一外人の批評が、必ずしも虚妄でないと信ずる。

直は正を意味し、勇を意味し、決斷を意味し、直前直往を意味する。その厭ふところは躊躇・緩慢・首鼠兩端である、曲ること、拗(ねぢ)れること、邪なことである。叢雲の劍は、その標章としてこの上なく相應はしい。元來、直の德の本領は、心の明らかに見た所に向つて直前するにある。若し右の三德を一括して之を一體と見れば、明はその靜的方面即ち知の方面で、直は活動方面即ち意の方面である。知の明らかに見た所をば意が直進して實現する。而して知の見方、意の働き方に潔くていひ知らぬ味はひのあるのが、邦人固有の性格といふべきであら

父母を　萬葉集にある長歌の一節、山上憶良の歌。

海行かば　海行かば水漬く屍山行かば草むす屍大君のへにこそ死なめかへり見はせじ（萬葉集）

う。明き心を以て、「父母を見れば尊し、妻子見ればめぐし、愛(うつく)し。」ゆゑに、その明き心の示すところに從ひ、直前して父母に事へ妻子を愛(いつく)しむ。君を仰げば、「八隅知し大君」・「現つ神」として國に臨み給ふ樣が限りなく高く貴い。故に、直前して、「海行かば水漬く屍、山行かば草むす屍」の獻身的奉公を效すのである。而して、その君父に事へ妻子を愛しむや、多くは水臭い思慮分別・利害勘定の結果でなくして、眞實掬すべき趣があつた。こゝが眞淵・宣長等の國學者が、感歎し自負して措かなかつた所である。無論何處の國にも、文化の進まぬ時代には、かやうな自然的の所があつたであらうし、日本民族にも、利害勘定的の行爲がなかつたとはいはれないであらう。また、自然眞實の行爲に弊害が伴なはないとも言はれないであらうけれども、我

素盞嗚尊　伊弉諾尊の御子。
日本武尊　景行天皇の御子。
鎭西八郎爲朝　源爲義の第八子、嘉應二年（一八三〇）歿、年三十二。
權化
千萬の　高橋蟲麿の歌。（萬葉集）
畠山重忠　源頼朝の臣。

が民族の特徴の一面は、とにかく此處に在つたやうに思はれる。その例は、遠い昔では、素盞嗚尊に見ることが出來る。あの日本武尊も素盞嗚尊系の勇者である。次いでは、鎭西八郎爲朝の腕白・勘當・九國押領・召還・保元の勇戰・大島配流の一生、これも素盞嗚尊系の大立者。これ等何れも向ふ見ずの樣でありながらも、妙に情に厚いところがあり、君父の事とあれば、水火も辭せずに直前するといふ風があつた。直・斷・決・勇の權化で、確かに大和民族固有性の一面を背負つて立つヒーローであつた。その他蒙古來寇の時に、西海の將士が身命を棄てて防戰した態度を見よ。代々の武士が「千萬の軍なりとも言擧げせず取りて來ぬべき男とぞ思ふ」といふ樣な、斷乎たる覺悟を見よ。畠山重忠や加藤清正の如く、竹を割つたやうに正直

曾我五郎　名は時致。
朝比奈三郎　名は義秀、和田義盛の子。
豁然大悟
金平淨瑠璃　櫻井丹波掾の語り初めた金平（金平本の主人公の名）の武勇を仕組んだ淨瑠璃、元祿時代以前に江戸で盛んに行はれた。
依怙
利潤
分別も　山本常朝の「葉隱」にある。
金戒

な豪傑が國民に尊崇されるのを見よ。曾我五郎朝比奈三郎のやうな一徹者が國民に愛されるのを見よ。豁然大悟の禪宗が盛んに行はれたのを見よ。おつと出せばやつと受ける金平(きんぴら)淨瑠璃の流行した趣を見よ。眞僞は知らないが、「正直は一旦の依怙にあらずと雖も、終に日月の憐みを蒙る。謀計は眼前の利潤たりと雖も、必ず神明の罰に當る」といふ戒が、天照大神の御言葉として神道家に唱へられてゐた。武士には「七息思案」といふ格言があつて、分別も久しくすれば收まる。武士は物事手つ取り早くするものぞといふことが、武士道の金戒になつてゐた。これ等は何れも直きを好む性質が、大和民族の心性の基本・精髓をなしてゐる證據である。

亘理章三郎
兵庫縣の人、明治六年生、倫理學者、東京高等師範學校教授。

無何有鄕

二　永遠の生命

亘理章三郎

個人の生命には限りがある。永遠を求め無窮にあこがれても、限られた生命は如何ともし難い。生きたものの惱みはそこに發生するのである。かの佛教や耶蘇敎で次の世に天國とか、極樂とか、乃至淨土とかいふ樣な世界を假定し、そこに永遠の生命があるとして、衆生を導き且つ勵まさうとするのも、畢竟この生きたものの惱みをいやさんがためである。しかるに我が日本精神は、その永遠の生命をさういふ無何有鄕に求めないで、現實なる日本の國そのものに見出す。我等日本民族は、この國を愛することによつて、この國に永遠に生きようとする。

この吾人の身體は數十年を待たずして死んでも、この國を愛する一念によつて、この國に永遠の生命を創造する。

若林强齋
名は進居、山城國（京都府）の儒者、享保八年（一七二三）歿、年四十五。

復命

我等は、代々我等の祖先の魂がこの國と共に永遠に生き、永遠にこの國を護つてゐると信じて來た。江戸中期の學者若林强齋は、大和魂の立志といふことを述べて、よくその點をあきらかにした。卽ち彼は「志を立てるのはこの五尺の身體の生きてゐる間だけではない。この身體は假令衰へても、斃れても、天つ神より下し賜はる御玉—御魂をどこまでも忠孝の御玉と守り立て、天つ神に復命して、八百萬の神の下座に列なり、國家を鎭める靈神となるに至るまで、ずんと立て通すことである」と、いつてゐる。これは畢竟我が日本の國民は、誰でも赤誠を以て國の爲に力を盡くすならば、その淸らかな精神は

道破

藤田東湖 名は彪、水戸(茨城縣)の藩士、安政二年(二五一五)歿、年五十。

神そのものとなつて、永遠の生命をつゞけることが出來るといふことを道破したものである。

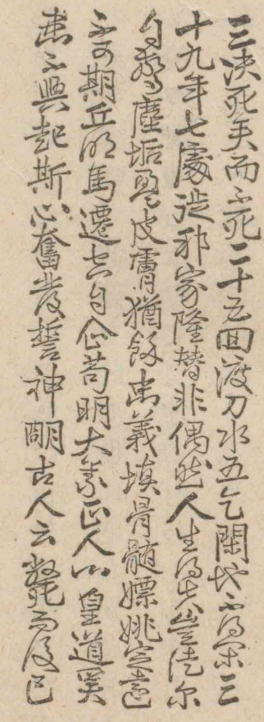
藤田東湖

維新前にあたつて若き日本の士氣を鼓舞作興した藤田東湖、あの東湖の有名な回天詩の一節に「苟も大義を明らかにして人心を正しうせば、皇道奚ぞ興起せざるを憂へん。斯の心奮發して神明に誓ふ。古人言へるあり、斃れて後已む」といふのがある。これは「苟も大義名分を明らかにして、曲つてゐる人間の心を正しうしたならば、皇道が何で興起せぬことがあらう。自分は發奮一番、神明に誓つて人心を正すつもりである。息の根の

藤田東湖筆

三決死矣而不死。二十五回渡刀水。五乞閑地不得閑。三十九年七處徙。邦家隆替非偶然。人生得失豈徒爾。自驚塵垢盈皮膚。猶餘忠義塡骨髓。嫖姚定遠不可期。丘明馬遷空自企。苟明大義正人心。皇道奚患不興起。斯心奮發誓神明。古人云斃而後已。

通ふかぎり、飽くまでこの事に當るつもりである。それで遂に斃れたら、古人のいふ通り萬事休むのだ」といふ、雄々しい志を述べたものである。



回天詩(藤田東湖筆)

然るにその翌年に出來た彼の正氣の歌は、劈頭日本の地理を詠んで、粹然として神州に鍾まる正氣即ち大和魂が、如何に立派な國史を作り來つたかを稱へ、次いで永遠に死なぬ日本精神の活動に言及し、「乃ち知る、人亡ぶと雖も、英靈未だ嘗て泯びず、長へに天地の間に

四維
　禮義廉恥。
烈公
　德川齊昭、水戸第九代の藩主、萬延元年（二五二〇）歿、年六十一。

斃れて後已む
　俛焉トシテ日ニ孳孳タルコトアリ、斃レテ後ニ已ム。（禮記）

在りて、凜然として彝倫を敍するを」と續けて、忠臣・義士の精神力は決して肉體と共に亡びるものでないことを説き、末尾に至つて、自分の覺悟を述べて、「生きては當に君寃を雪ぐべく、復四維を張るを見ん。死しては忠義の鬼となり、極天皇基を護らん」といつてゐる。これは「自分の生きてゐる間は、主君烈公の寃を雪いで道德を此の世に明らかにしよう。が、死んだら、忠義の靈魂となつて、天地の有らんかぎり永遠に皇基を護り奉らう」と、いふのである。

前年の回天詩では、生きてゐる中はやるが、死んだが最後、萬事休むのだといつたが、此の詩では、生きてゐる中は勿論、死後と雖も活動は休止せぬといふ考に進んだのである。

元來「斃れて後已む」といふ言葉は、支那の禮記といふ書物に

箴言

吉田松陰
　名は矩方、長州國（山口縣）の藩士、勤王家、安政六年（二五一九）歿、年二十九。

ある。幼少から此の書を精神の糧としてゐた彼は、多分その感化を受けて、それを箴言としたのであらう。然るに、その後、段々我が國史の精神に深く立ち入つて、幾多忠臣・義士の研究を進めた結果、「斃れて後已む」などいふところで止まつてゐられず、こゝに天地のあらんかぎり皇基を護るといふ、日本精神の體現者となつたのである。

吉田松陰もまたさうであつた。かの有名な士規七則には、「死して後已むの四字、言簡にして義廣し。堅忍果決、確乎として拔くべからざる者は、これを舍きて術なきなり」とある。彼はかやうに、死して後已むといふことを以て、男兒が覺悟を定める唯一無二の方法だと考へてゐた。然るにその翌年になると、楠公七生の說を作つて、「楠公兄弟はたゞ七度どころでは

ない、千たび萬たび生まれかはつて、永遠に死なない」といひ、ここに明らかに日本精神の永遠の生命に悟入した。かくて、彼はその絶筆たる留魂錄に、雄々しくも、

身はたとひ武藏の野邊に朽ちぬともとゞめおかまし
大和魂

と、詠じてゐる。東湖・松陰の兩英傑が支那精神の粹から一轉して、日本精神の粹を自覺するに至つたといふことは、いかにも意義深いことといふべきである。この兩英傑の覺悟・自覺こそ、實に日本精神が皇國に永遠の生命を見出すといふ最もよい例證である。かやうに此の皇國を愛し、此の皇國に永遠の生命を創造してこそ、我々はほんたうの日本人になり得たといふことが出來るのである。

（國民道德）

綱島梁川　名は榮一郎、岡山縣の人、倫理學者、明治四十年歿、年三十五。

あれこれを　あれこれを集めて春の朧かな　芭蕉

偃蹇

いづれか‥‥事實たらざる

碧落

躍如

三 秋の力

綱島梁川

「あれこれを集めて霞む春の朧」を、人生の夢とも見ば、秋はただちにこれ覺醒なり、事實なり。蔦紅葉の中より露はれ出づる節くれだちたる樹身、枯芝生の底より躍り出づる偃蹇たる雲根、いづれか秋は人に迫るの事實たらざる。中にも秋の力を最も強く贍(ゆた)かに言ひ出づるものは、黃柚なり、赤柹なり。一美術家語りていはく「われ曾てひねもす秋を郊外に探りて秋に會はず、歸路會、夕空鮮やかに結び出でたる赤柹の累々たるを見て、始めて秋こゝにありと叫びき」と。げにも、秋の姿をさながらに具象にして描き出だせるものあれば、そは碧落の空に躍如として結び出でたる赤柹を措きてはまたとあらじ。

蕪村　姓は谷口、名は信章、與謝氏ともいふ。攝津國（大阪府）の人、俳人・畫家、天明三年（三四三）歿、年六十八。
抱一　姓は酒井、播磨國（兵庫縣）の人、畫家、文政十一年（三四八八）歿、年六十八。
淋漓
揮灑
天籟・地籟
砰湃
道士の風岸

秋は實に個の累々の赤柿、その全幅の表現を得たる趣あるにあらずや。　その昔、蕪村・抱一などいふ畫家が、寥々たるこの一物に、大膽なる落想をこめて、一幅の秋の心を勁く隈なく、淋漓揮灑し出だせる、詩眼流石に凡にはあらざりけり。

見よ、秋の潭に淵默の智あり、秋の空に剛明の象あり。　月は清輝を帶び、星に聲あり。　萬葉に埋もるる枯井の水、なほ鬚眉を鑑すべく、夢を歌ふ滿園の蟲しぐれ、人の深省をいざなふ。空際きはやかに走る波濤の山、極目鮮やかにくねる一河の帶、樹間の聲の錚々として勁き、天籟・地籟の砰湃として厲（はげ）しき、あはれ、秋の萬象、何物かすべてこれ、空明・照徹・剛克・雄健の一氣を以て貫かざる。何物かすべて、哲人の雄姿、道士の風岸を以て人に迫らざる。　秋は夢に非ずして、事實なり。　人は秋に立つて、

如々たり
明瑩
豐贍
婆娑

たゞちに事實と面相接するなり。　秋は何等の天文・地采の形式を藉らざる、裸體の儘なる思想なり。　それは如々たり。　故に明瑩なり、澄徹なり、而してまた充實なり、豐贍なり。　春草の紗、夏木の衣、すべて名殘なく脫ぎすてて、あらはなる葛蘿の筋、樹幹の骨、健くもまた雄々しき丈夫神（ますらをがみ）の面影は、げに秋にこそふさはしけれ。　もし秋に一味の文采ありとせば、白蘋・紅蓼の裳裾、蘆花・淺水の帶、桔梗・苅萱・尾花が波の袂も輕き姿なるべし。あはれ、その澹如たるすゞしさは、かの哲人・道士の婆娑たる一衣の高風にも似たるかな。　至竟、秋の力は、その衣にあらずして、赤裸々の事實にあり、思想にあり。

（病間錄）

四 國語の變遷

編者

言語は絶えず變化してゐる。而も其の變化は急劇に現はれるものではなく、極めて徐々に連續的に行はれて行くものである。從つて國語の歴史についても、その時期區分をする事は頗る困難である。紀元何年を境としてそれ以前がどう、それ以後がどうといふ樣な、明確な區分は勿論出來る事ではない。しかし吾々は國語遷移の跡を通覽する時に、朧ろげながらも、或色の濃い部分と、他の色の濃い部分とがある樣に感じる。その境界はぼかされてゐて、何處と明確には指し難いけれども、さうした色の濃いと思はれる部分々々を中心として見れば、やはり或程度までは時期の區分が出來る樣に思は

れる。而して其の區分は、資料の少ない奈良朝以前はさておいて、それ以後を大體、上古(奈良朝時代)・中古(平安朝時代)・近古(鎌倉・室町時代)・近世(江戸時代)・近代(明治以後)といふやうに、政治史のそれに準據して、甚だしく不自然ではないやうである。畢竟、政治上の變革、政治中心の移動は人心の動搖を招致するものであり、人心の動搖は言語の上に反映せられずには已まないからである。次に國語變遷の跡を大觀して見よう。

奈良朝時代は、漢學や佛教も盛んであり、制度文物すべて外國の物を取り入れるに急な時代であつたから、外來語の國語に取り入れられた數も、非常に多かつた事と思はれるが、歌の上に現はれたものは極めて少ない。散文の中には割合に多く見えるが、それもすべて名詞としての資格を與へられてゐ

語彙

古今集 二十卷、醍醐天皇の延喜五年(一五六五)に貫之・友則・躬恒・忠岑等が勅を奉じて撰進した。

勅撰

るものばかりである。わが國語には限らないが、外來語の輸入は、殆どその國語の語彙を富ますだけで、語法までも影響を受ける事は極めて少ないものである。

平安朝時代は、平安奠都から約四百年、政治の中心が鎌倉に移るまでの間をいふ。前代に引續いて重んぜられた漢文學が、一時全盛を極めた結果として、和歌の暗黒時代を現出したが、やうやく國粹に目覺めては和歌の復興となり、つひには古今集勅撰とまで展開して行つた。平假名・片假名は萬葉假名から脱化して、國語の表記は愈、便利になつた。そこに散文の文學が發達し、國語は愈、精錬せられた。

和歌の用語は、前代から或意識をもつて選ばれたのであるが、この時代になつては愈、限定せられて、話語とは益、距離が出

來た。啻に和歌の用語ばかりでなく、散文の用語も、朱雀天皇の頃からは次第に話語から離れる傾向を持つたらしい。この時代の末に至つては、かうした傾向は益、顯著となり、平安朝盛時の言語は、以後、長く文語の標準となつたのである。

この時代、引續き漢語が輸入せられて、形容詞・動詞・副詞等にも用ひられるやうになつた。それが殆ど國語化した姿をもつて、物語などにも現はれてゐる。この時代の末は、所謂院政時代である。この頃になると、促音便やバ行四段・マ行四段の動詞の長音便が現はれ、二段活用の一段化の傾向もやゝ強くなり、また連體形の終止形同化の傾向を生じて、次の時代に於ける大變化を豫想せしめてゐる。藤原氏の勢力が衰へ、武士が實力を得始めた事などから、地方語が京都語に影響する事

が多くなつた結果であらうといはれてゐる。

鎌倉室町時代は、鎌倉幕府時代・吉野朝時代・室町幕府時代を含んだ約四百年間で、要するに武士の跋扈した時代である。この時代は、概していへば戰亂多く人心は定まらず、學問・文藝不振の時代であつた。文語と話語との懸隔は益〻甚だしくなつたが、その文語も和歌はとにかく、散文に至つては前代のものを模しきることが出來ないで、所々に當時の話語の面影を覗かせてゐる。一方にはまた、漢文脈を多分に取り入れた和漢混淆の文章が發達して、漢語の國語に入り來るものは愈〻多くなつた。漢語はかうした文字の上から移植せられた外に、この時代には、主として禪僧によつて、直接支那から輸入せられたものが少なくない。例へば、普請・行燈の類である。

江戸時代は、江戸幕府の時代約三百年で、戰亂すでに治まり人々太平を樂しんだ時代である。この時代は、室町時代の言語を承けて話語の整理せられた時代といふべく、動詞では、「落つる」「受くる」等の二段活用の形は漸次滅亡して、「落ちる」「受ける」等の一段活用に統一せられ、音便では「忍うで」「賴うで」等、バ行四段・マ行四段の長音便が廢退して、「忍んで」「賴んで」等の撥音便が進出し、關東語が勢力を得て後は、「流いて」の如きサ行四段のイ音便は、もとの形に還元せられた。助動詞「よう」（未來）・「です」（指定）等の發達もあるが、三百年を通じて、概しては甚だしい變化を見ない時代である。方言では、江戸の發展と共に江戸言葉が發達し、次第に勢力を得て、文藝上では今まで關西方言の爲に虐げられてゐた關東方言の爲に氣を吐くに至つた。江戸

雅醇

彫琢

時代の文語は、大體に於て前代の繼承であつたが、元祿頃から振ひ興つた國學者は、雅醇な古の國語に憬れて、その國語相を己等の時代に再現しようとまで努力した。しかし一方には又、國語に無關心な漢學者もあつて、其の漢籍の讀方が國語を混亂せしめた事も多かつた。

明治の普通文は、實に漢文讀下しの影響を受けたものであつたのであるが、明治二十年代から動き始めた言文一致更生の機運は花を開き、實を結び、種々試錬彫琢を經た後、大正時代に入つては、威嚴の不足感から容易に採用せられなかつた新聞の論説等に迄、採用せられるやうになつて、文語文はだんだん影を潛めて來た。

外國語や外國語格を取り入れる事は、國語を豐富にし、表現

に新しみを加へる利點もあるが、その濫用は國語の純正を害するもので、嚴に戒めなければならぬ事である。　名山・名川には日本アルプス・日本ラインの如く外國名をつけ、國産品にも片假名で西洋流の名をつけて得々としてゐる現代は、誠に外國語の濫用の時代だといはれよう。　吾等の周圍には西洋風の名をつけたものが如何に多くある事か。　これでは既に精神的に彼等に屈服して了つてゐるのであつて、世界諸國の上に立つて、世界の文化を指揮する事は、まだ〳〵前途遼遠だといはねばならぬ。

倩、國語は上述の如くそれ自身の動きにより、又外國語を取り入れる事によつて、幾變轉した。　併し、其の根柢の本質は少しも變はつて居らぬ。　どこ迄も、我等祖先の精神が其の中に

生活した處の國語である。東西二大方言の中にも、又多くの小さな方言を有する、併し夫も畢竟根幹を得て茂る枝葉である。我等は今も其の中に住して、縱には祖先の心を受け、横には同胞相結ぶ。國語は實に一國の標識であり、國體を維持し、國民を結合する精神的の鎖である。之を世界の歴史に見るに、一國の國語の消長は、その國勢の消長に緊密な交渉を有つてゐる。故に我等は現代の外國語濫用を悲しむと共に、方言の統一が遲々として行はれぬ事を悲しまなければならぬ。方言は國語の表面だけの相違ではあるにしても、其の相違は國語の力を殺ぐ事が極めて大きいものである。而して方言の統一は、學校に於ける國語教育だけで出來るものではない。新聞・雜誌・文學作品等も與つて力はあるものの、猶それだけで

は出來るものではない。要は國民全體の自覺と努力とに俟たねばならぬのである。

現在は、大體東京語が標準になつてはゐるが、未だ標準語の問題は明確に具體的に解決せられては居らぬ。方言統一に向つて進むに方つて、まづ必要な道標は標準語でなければならない。更に國語を純正ならしむるには如何にすべきか。漢字と共に取り入れられた無數の漢語、近世以後取り入れられた多くの歐米語、これ等の整理を如何にすべきか、假名遣を如何にすべきか。これ等は凡て國民全體の自覺に俟たなければならぬ事柄である。國語の愛護、それは一部の學者間にのみ唱へられて、未だ國民全體の聲とならぬのを悲しむ。

（國語史概説）

消息文例　藤井高尚の著。

心をやる

こちなし

五 雅文抄

一 消息文例の序

今の世の歌よみは、おしなべて歌よむことも文かくことも、いとつたなくして、言葉づかひ、ひが〳〵しく、心しらひあやしくさとびなど、すべていにしへにたがへるふしのみ多かるうちに、文かくことは殊につたなくして、さらに古のみやびぶみのさまをばえ知らぬ中にも、消息文などはしも、むげにたどたどしきさまにて、皆いと幼き口つきなるを、おのがじしは心をやりて、さすがにえんだちけしきばめることとうちまぜたるなど、なか〳〵にいとしなくこちなく、かたはらいたきわざになむありける。

（鈴屋集）

鈴屋集　九卷、本居宣長の和歌・和文を集めたもの。本居宣長―伊勢國(三重縣)の人、江戸時代の國學者、享和元年(二四六一)歿、年七十二。

見給へ―しか―ど

心なき身

二 雪のあした友の許に

今朝のけしきめづらしくは御覽ぜずや。冬になるより、いつしかとのみ日ごとに待ちわたり侍りしに、昨日のゆふべ、風いたく吹きあれ、雲のたゝずまひもいみじくさえわたりて、飛ぶ鳥のけしきまで、必ずふりぬべき空とは見給へしかど、いとかくまで深くとは思ひ給へかけざりきかし。明け暮れ心へだてぬ友どちは、かゝらぬ折だに何事につけても、まづ思ひ給へ出でらるるわざなるを、ましてかくめづらかなる朝ぼらけを、心なき身のひとりのみ見侍らむことの、いとあたらしく思ひ給ふれば、よし跡つけても人の訪ひたまはましかば、こよな

おぼさるらむ　もの

さう〳〵し

くをかしさもまさりぬべきものと思ひ給ふるに、いかにとだにおとづれもし給はぬは、いと思はずに怨めしくなむ。

このけしき、さりとも見過ぐし難くはおぼさるらむものをとは、思ひやり聞えさすれど、しろしめすやうに、いとうひ〳〵しき口には、何事もいはれ侍らず。筆のしりとるはかせだに侍らで、とりつくろひ侍らむやうも侍らねば、思ひ給ふる程の心も、たゞおしこめてなむ。

そこには、いかに見どころある心ふかき言の葉多く物し給ふらむ。一つ二つ賜はせよかし。さてなむせばき庭の雪の光も加はりて、友なき今朝のさう〳〵しさもなぐさめ侍らむ。いでやかく聞えさするも、もとよりあやしき鳥の跡の、けさはいとゞ筆のさきしみこほりて侍れば、御覧じわくかたも侍らずや。あなかしこ。

（鈴屋集）

侍らずや

上田秋成　大阪の人、江戸時代の國學者、文化六年(二四六九)歿、年七十八。

ゆかし

市の内に隱れ　小隱ハ陵藪ニ隱レ、大隱ハ朝市ニ隱ル。(文選)

三　上田秋成の許へ

春立ちかへるのどけさは、わきて都の空こそゆかしう侍れ。今は巖の中なる住ひをふり捨てたまひて、巷の柳櫻にたちまじらひ給ふらむは、いかに心ゆく御住家ならまし。

巣ごもれる谷の鶯いかなれば都のはるにこゝろひかれし

となむ聞えまほしき。されど、うき世の塵ののがれがたかるも、猶市の内に隱れけむ古人のためしにならひ給ふべければ、世のさが知らぬ人々とのみ、みやび交はし給ふらむは、山住みのつれ〳〵ならむよりはと、おしはかりまゐらするものから、

遠くて近
遠くて近きもの、極樂・船の路云々。(枕草子)

琴後集
十五卷、村田春海の和歌・和文の集。村田春海―江戸の人、國學者、文化八年(二四七一)歿、年六十六。

伴蒿蹊
江戸時代の國學者、歌人、文化三年(二四六六)歿、年七十四。

遠の御門
江戸をさす。

立田姫

徒らに千里のよそにありて、よろづまのあたり聞え承らぬこそあかぬわざなれ。さはいへ、雁の翅の行きかひだに絶えずば、なか〳〵に遠くて近きたぐひとや思ひ慰み侍らむ。柳の糸のくりかへしつゝ、今年もとだえなく聞えまゐらせばやと思ふを、ゆめ鶯の鳴く音なをしみたまひそ。

(琴後集)

四 伴蒿蹊におくる書

秋の日數も殘りすくなうなり侍りにたるを、都の御住ひよ、いかに明かし暮らし給ふぞ。この遠の御門は、大方に山いと遙かにて、露霜の心おそきならひに侍れば、立田姫のすさみもはか〳〵しうも侍らずなむ。さるは都の空のみゆかしう思ひやられ侍るが中に、まして塵に染み給はぬあたりは、なにの

こそ多からめ

水雞笛
水雞をさそひ出すために吹く笛。

行脚

山里、くれの古寺、御心ゆくかたぞ多かりなむ。

都人いづれの山のにしきをか言葉の色にたぐへては
見る

この頃は御手染のめづらかならむこそ多からめ。風のたよりをわすれ給はで示したまはば、下照る影に伴なはれ侍らむ心地せむは、嬉しきわざなるべし。あなかしこ、立つ霧にな隔てたまひそや。

(琴後集)

五 水雞笛

御約束の水雞笛御送り下され忝く珍重致し候。此の里の人々聞き馴れず、女子ども集まり、我を藝人の様に申し、をかしく候。行脚先國どころにより一向音を知らぬ人御座候間、吹

きて聞かせ申すべくと悦び申し候。　鹿笛も木曾よりもらひ申し候。　ほとゝぎす笛も御座候はばほしきものに候。　水雞笛つくる人は作るべくと存じ候。　御面倒ながら之も御聞き下さるべく候。　出來候はば御頼み下さるべくと頼み入り申し候。　何にても相應望みのもの細工人へ謝禮いたすべく候。⑨　殺生の道具ながら、水雞笛・鹿笛も只ふくはをかしく候。　はつかりの聲、水雞たゝくなど、歌にも發句にも作る人の、さし竿にてとり網にかけなど致し候は、口と心と相違にて、名句吐き候ともうそつきといふものに候へば、まことの風人から見ればあはれなる事にて、⑩　たとへころさずとても、雲に飛び地にはしり候鳥をちひさき籠に入れてたのしみとなすは、牢番も同じことにて候を心附かず、籠をならべ、これは二兩の駒鳥なり、これは五兩の鶯なりといひて、摺餌に小袖の肌おしぬぎ、高祿の人にもあさましきさまする人有るものに候。　かの閑籠放白鷴の詩意など教訓なさるべく候。　伊賀の家中の人にも御座候間、土芳にも此の事度々申遣はし候。

うぐひすや餅に糞する緣の先

二月十六日　　芭蕉

一笑様

（芭蕉書簡集）

小袖

白鷴　閑古鳥の異名。

土芳　伊賀の人、芭蕉の門人。

二月十六日　元祿五年（二三五二）

一笑　加賀の人、俳人、芭蕉に私淑した人。

十訓抄　三卷、著者未詳。鎌倉時代のもの。近古の小話を集めた教訓書。

わりなし

徳

六十　訓抄

一

すべて人の振舞は、おもらかに言葉ずくなにて、人をもならさず、人にもならされず、戯れを好まず、おとなしくさしふるまひて居たれば、心の中は知らず、よきものかなと見えて、人にも恥ぢられ、ところをもおかるるなり。かゝれども、これはなつかしく思はしき方にはあらず。たゞみだるべき所にはみだれ、折にしたがひて戯れをもし、をかしき事をも笑ひ、人のなごりをも惜しみ、友にしたがふ心ありて、わりなく思はれぬるは徳多かり。

二

驕慢

をこ

人の世にあるならひ、驕慢を先として、よく穏便なるは少なし。或は、自由の方にて穏やかならず、これはわが涯分を料らず、さしもなき身を高くおもひあげて、主をも輕しめ、傍輩をもさぐるなり。或は、偏執の方にてかたくなり、これはわが思ひたることをいみじうして、人のいふことを用ひざるなり。或は、世にかはれる振舞あり、これは昔をのみいみじと思ひて、今の世にしたがはぬなり。或は、折節に似ぬをこあり、これは内々よくなれにしかばと思ひて、はれに出でて人をならし、もしは、うちとけ遊ぶ所に交りて、われは未だ亂れぬまゝに、ことうるはしう紐さしかためて人をしらかし、その座をさますなり。

おほかた、かやうのことは、驕慢をもととして、心のをさなき

ある經には
顚ハクハ心ノ師ト作リ、心ヲ師トセザレ（涅槃經）

より起れり。これによりて、つひに生涯をうしなひ、後悔を深うす。かゝれば、たとひ、身をよしと安んじ、昔をいみじとしのび、物をおもしろしと思ふとも、人目をはゞかり世のそしりをつゝしみて、心に心をまかすまじきなり。されば、ある經には、「心の師とはなるとも、心を師とせざれ」と、說かれたりとかや。

凡そ、貧しき者の諂はざるはあれども、富める者の驕らざるはかたければ、皆人の習なれども、身のいたりて、德の重からむにつけても、よくしづまりて穩やかなるおもひをさきとすべし。

三

人をあなづることは、しなかはれども必ずあることなり。或は貧しく賤しきをもあなづり、或は、不覺なるをもあなづり、

ふるまひとふるまふこと

侮るかつらに
馬鹿にした葛（かつら）のために倒される。

思ひけつ
心劣り

或は、われよりさがれるをもあなづりて、することをもいふことをも、さばかりにこそと思へり。或は、親しみむつるるを侮づり、おほかた、不運なるものをば、行ふ所のことがらよからぬやうに思ひ、いやしきものは、ふるまひとふるまふこと、いたづらごとと思へり。これは無智の人のあることなり。これによりて、いふまじき言をもいひ、すまじき業をも振舞ふほどに、侮るかつらにたはぶれして、想はざる外の恥がましきことにもあひ、厭はるまじき者にも厭はれぬれば人に輕く思ひけたれ、心劣りせらるるなり。

四

人は慮なく、言ふまじき事を口とく言ひ出し、人の短をそしり、したる事を難じ、かくす事を顯はし、はぢがましき事をたゞ

笑の中の劍　見かけは温和を裝うて、內心の陰險なこと、唐書姦心傳に見える語。

す。これらはすべてあるまじきわざなり。われは何となく言ひ散らして思ひもいれぬ程に、言はるる人は思ひつめて、憤深くなりぬれば、はからざるに恥をも與へられ身の果つる程の大事にも及ぶなり。笑の中の劍はさらでだにも恐るべきものぞかし。又よくも心得ぬ事をあしざまに難じつれば、却りて身の不覺あらはるるものなり。大方口輕きものになりぬれば、「某にその事なきかせそ。彼の者にな見せそ」など云ひて、人に心をおかれ隔てらるる、口惜しかるべし。又人のつゝむ事のおのづから洩れ聞えたるにつけても、かれ話されしなど疑はれむは面目なかるべし。しかれば、かた〴〵人のうへをつゝしみ、多言を止むべきなり。

五

おぼろげならず

人々より合ひてさるべき遊びなどせむには、たとひ身にとりて安からずくちをしき事に遭ひたりとも、かまへてその日のさはりあらせじと計らふべきなり。「その人のありてしかじかの折の事さめにき」と言はるる、口惜しき事なり。しかれば行かぬ先より計らひ、惡しかるべき所へはさし出でぬには如かじ。もし惡しく計らひて交り居なむ後は、おぼろげならぬ、身のいたづらになりぬべき程のきずなるべくば、事なきさまに言ひなし、たはぶれにもてなして、おとなしかるべきなり。況んや我が使はむ人のあやしからむために、今せがみさいなむ事、いとみぐるしかるべし。

七 新島守

四月二十日 仲恭天皇の承久三年(一八八一)。
帝 第八十四代順德天皇。
春宮 第八十五代仲恭天皇。
御兄の院 第八十三代土御門天皇。
父みかど 第八十二代後鳥羽天皇。
本院とぞ聞えさする
家實 近衞基通の子、仁治三年(一九〇二)歿、年六十四。
道家 後京極良經の子、寛元三年(一九〇五)歿、年六十。
あづまの若君 當時の鎌倉將軍、賴經、康元元年(一九一六)歿、年三十九。

四月二十日、帝おりさせ給ひ、春宮四つにならせ給ふに譲り申させ給ふ。近ごろ皆この御齢にて受禪ありつれば、これもめでたき御行末ならむかし。同じき二十三日、院號の定めありて、今おりさせ給へるを新院と聞ゆれば、御兄の院をば中院と申し、父みかどをば本院とぞ聞えさする。このほどは家實のおとゞ關白にておはしつれど、御讓位の時、左大臣道家のおとゞ攝政になり給ふ。かのあづまの若君の御父なり。

さても院のおぼし構ふること、忍ぶとすれどやう〳〵もれ聞えて、ひがしざまにもその心づかひすべかめり。あづまの代官にて伊賀の判官光季といふものあり。かつ〴〵かれを

心づかひすべかめり
かつ〴〵
御勘じ
時にこそあなれ
かつは
時房 北條時房、義時の弟、仁治元年(一九〇〇)歿、年六十六。
泰時 北條泰時、義時の長子、仁治三年(一九〇二)歿、年六十。

御勘じのよし仰せらるれば、御方に參るつは者ども押寄せたるに、遁るべきやうなくて腹切りてけり。まづいとめでたしとぞ院はおぼしめしける。

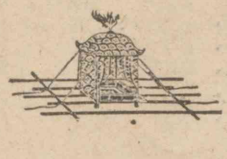
あづまにもいみじうあわてさわぐ。さるべくて、身の失すべき時にこそあなれと思ふものから、討手の攻めきたりなむ時に、はかなきさまにて屍を曝さじ、おほやけとも、みづからしたまふことならねば、かつはわが身の宿世をも見るばかりと思ひなりて、弟の時房と、泰時といふ一男と、二人を頭として、雲霞の兵をたなびかせて都にのぼす。泰時を前に据ゑていふやう「おのれをこのたび都にまゐらすることは思ふところ多し。本意のごとく淸き死にをすべし。人にうしろ見えなむには、親の顏また見るべからず。今をかぎりと思へ。

義時　北條義時、時政の子、元仁元年(一二二四)歿、年六十二。

うしろめたし

心を得

鳳輦



參りあへらば

賤しけれども義時、君の御爲にうしろめたき心やはある。されば横ざまの死にをせむことはあるべからず。心をたけくおもへ。おのれうち勝つものならば、ふたゝびこの足柄・箱根山は越ゆべし」など、泣く〳〵いひきかす。「まことにしかなり。又親の顔をがまむこともいとあやふし」と思ひて、泰時も鎧の袖をしぼる。かたみに今やかぎりとあはれに心細げなり。

かくてうち出でぬるまたの日、おもひかけぬほどに、泰時ただひとり鞭をあげてはせ來たり。父胸うち騒ぎて、「いかに」と問ふに、「軍のあるべきやう、大かたのおきてなどをば、仰せの如くその心を得侍りぬ。もし道のほとりにも、はからざるに、かたじけなく鳳輦を先立てて御旗をあげられ、臨幸の嚴重なることも侍らむに參りあへらば、その時の進退いかゞ侍るべか

かしこまり

公經　藤原氏、西園寺家の祖、寛元二年(一二四四)歿、年七十四。

御うまご　將軍賴經を言ふ、賴經は公經の女の出。

らむ。この一ことを尋ね申さむとてひとり馳せ侍りき」といふ。義時、とばかりうち案じて「かしこくも問へるをのこかな。その事なり。まさに君の御輿に向ひて、弓を引くことはいかがあらむ。さばかりの時は兜を脫ぎ、弓の弦を切りて、ひとへにかしこまりを申して、身を委せ奉るべし。さはあらで、君は都におはしましながら、軍兵をたまはせば、命を捨てて、千人が一人になるまでも戰ふべし」と、いひも果てぬに、いそぎ立ちにけり。

都にもおぼしまうけつる事なれば、ものゝふども召しつどへ、宇治・勢多の橋も引かせて、かたきを防ぐべき用意、心ことなり。公經の大將ひとりのみなむ、御うまごのこともさる事にて、北の方一條中納言能保といふ人のむすめなり。その母北

故大將 源頼朝。
七條院 藤原殖子、後鳥羽天皇の御母、安貞二年（一二二八）歿、年七十二。
修明門院 藤原重子、順德天皇の御母、文永元年（一二六四）歿、年八十三。
言にいでてこそ…たまはねど、給はざめり
富士川 甲斐國（山梨縣）に發して駿河灣に入る。
天龍川 諏訪湖（長野縣）から出て遠江國（靜岡縣）を流れて海に入る。
えもいはず

の方は故大將のはらからなれば、一方ならずあづまを重くおぼして、さしいらへもせず、院の御心の輕き事とあぶながり給ふ。七條院の御ゆかりの殿ばら、坊門大納言忠信・尾張中將清經・中御門大納言宗家、又修明門院の御はらからの甲斐宰相中將範茂など、つぎ〳〵あまたきこゆれど、さのみは記しがたし。いくさにまじり立つ人々、このほかの上達部にも殿上人にもあまたありき。

中院はあかで位をすべり給ひしより、言にいでてこそ物したまはねど、世のいと心やましきまゝに、かやうの御さわぎにも、殊にまじらひ給はざめり。新院はおなじ御心にて、よろづいくさの事なども掟ておほせられけり。

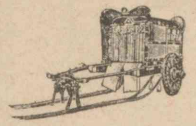
いつの年よりも五月雨はれ間なくて、富士川・天龍などえも

龍馬

いはず漲りさわぎて、いかなる龍馬もうちわたしがたければ、攻めのぼる武者どももあやしくなやめり。かゝれども、遂に都にちかづくよしきこゆれば、君の御武者も出で立つ。その勢六萬餘騎とかや。宇治・勢多へ分ちつかはす。世の中ひゞきのゝしるさま言の葉もおよばず、まねびがたし。あるはふかき山へ逃げこもり、遠き世界に落ちくだり、すべてやすげなく騒ぎ滿ちたり。いかゞあらむと君も心みだれておぼしまどふ。かねてはたけく見えし人々も、まことのきはになりぬれば、いと心あわたゞしく、色を失ひたるさまどももたのもしげなし。

六月二十日あまりにや、いくばくの戰だになくて、つひに御方のいくさやぶれぬ。荒磯に高潮などのさしくるやうにて、

鳥羽殿 城南の離宮ともいふ、京都市伏見區下鳥羽に舊跡がある。



網代車

あやしものにもがなや とりかへす物にもがなや世の中をありしながらのわが身と思はむ（源氏物語河海抄）

泰時と時房と亂れ入りぬれば、言はむ方なくあきれて、上下ただ物にぞあたりまどふ。あづまよりいひおこするまゝに、かのふたりの大將軍はからひおきてつゝ、「保元のためしにや、院の上、都の外に遷したてまつるべしときこゆれば、女院・宮々所所におぼしまどふ事さらなり。

本院は隱岐の國におはしますべければ、まづ鳥羽殿へ、網代車のあやしげなるにて、七月六日入らせ給ふ。今日をかぎりの御ありきあさましうあはれなり。「ものにもがなや」と、おぼさるるもかひなし。その日やがて御ぐしおろす。御とし四そぢに一つ二つやあまらせ給ふらむ。まだいとをしかるべき御ほどなり。信實朝臣召して御すがたうつしかかせらる。七條院にたてまつらせ給はむとなり。かくて同じ十三日に、

いみじういかいらめし いみじう……から、うらめし

土佐院 第八十三代土御門天皇、建久九年（一一九八）御受禪、承元四年（一二一〇）御讓位。

佐渡院 第八十四代順德天皇、承元四年（一二一〇）御受禪、承久三年（一二二一）御讓位。

御舟にたてまつりて、遙かなる波路をしのぎおはします御心地、この世の同じ御身ともおぼされず。いみじういかなりける代々の報にかとうらめし。

新院も佐渡國にうつらせ給ふ。上達部・殿上人それより下はた殘りなく、このことに觸れにしたぐひは重く輕く罪に當るさまいみじげなり。中院は初めよりしろしめさぬことなれば、あづまにもとがめ申さねど、父の院遙かに移らせ給ひぬるに、のどかにて都にあらむこといとおそれありとおぼされて、御心もて、その年閏十月十日、土佐國畑といふ所に渡らせ給ひぬ。

六つにて位につきたまひて、十三年おはしましき。おりたまひて後も、土佐院十二年、佐渡院十一年、なほ天の下はおなじ

津の國の

津の國のこやとも人をいふべきに隙こそなけれ蘆の八重葺　和泉式部
（後拾遺集）

事なりしかば、すべて三十六年がほどこの國のあるじとして、萬機のまつりごとを御心ひとつにをさめ、百の官をしたがへたまへりしそのほど、吹く風の草木をなびかすよりもまされる御ありさまにて、遠きをあはれみ、近きをなでたまふ御めぐみ、雨の脚よりもしげければ、津の國のこやのひまなき政をきこしめすにも、難波の葦のみだれざらむことを思しき。

隱岐島

藐姑射の山の峰の松もやう〱枝をつらねて、千代に八千代をかさね、霞のほらの御住居、幾春をへても空ゆく月日のかぎり知らず、のど

おはしまし‐ぬ‐べかり‐ける‐世
ありありて

月日をかぎりたらむだに……心ぼそかるべし。　まいて……

けくおはしましぬべかりける世を、ありありてよしなき一ふしに、今はかく花の都をさへ立ちわかれ、おのがちり〲にさすらへ、磯の苫屋に軒をならべて、おのづからこととふものとては、浦に釣するあま小舟、鹽やく煙のなびく方をもわがふるさとのしるべかとばかり、ながめすごさせたまふ御すまひどもは、それまでと月日をかぎりたらむだに、あす知らぬ世のうしろめたさにいと心ぼそかるべし。　まいていつをはてとかめぐりあふべきかぎりだになく、雲の浪けぶりの浪のいく重とも知らぬ境に、世をつくしたまふべき御さまども、口惜しといふもおろかなり。

このおはしますところは、人ばなれ、里とほき島の中なり。海づらよりはすこしひき入りて、山かげにかたそへて、大きや、

ことそぐ

柴の庵　いづくにも住まれずばたゞすまであらむ柴の庵のしばしなる世に　西行法師（新古今集）

ゆゑづく

水無瀬殿　本院の造り給うた殿、攝津國（大阪府）三島郡島本村大字廣瀬にあつた。

二千里の外　三五夜中新月色、二千里外故人心。（朗詠集）

增鏡　十卷、著者不明、後鳥羽天皇から後醍醐天皇までの事蹟を假名文で記した歷史物語。

かなるいはほのそばだてるをたよりにて、松の柱に葦葺ける廊など、けしきばかりことそぎたり。まことに、柴のいほりのたゞしばしと、かりそめに見えたる御やどりなれど、さるかたになまめかしく、ゆゑづきてしなさせ給へり。水無瀬殿おぼし出づるも夢のやうになむ。はる〴〵と見やらるる海の眺望、二千里の外ものこりなき心地する、今さらめきたり。しほかぜのいとこちたく吹きくるをきこしめして、

われこそは新島もりよおきの海のあらきなみ風こゝろして吹け

同じ世にまたすみのえの月や見むけふこそよそにおきの島守

（增鏡）

藤村作　福岡縣の人、明治八年生、文學博士、國文學者、東京帝國大學名譽教授。

八　日本文學研究の新意義

藤村作

我々日本國民に取つて、生命の糧であり力であるものは國文學である。取り出しても〳〵盡くる事なく、一時代から次の時代へと、絕えず我々の內的生活に糧を供してくれる寶庫は、我が二千年來の國文學である。我々は國文學を知り、國文學に親しむ事に由つて、常に日本國民として行くことが出來る、眞の日本國民たる生命を新にして行くことが出來る、眞の日本國民として、反省と自覺との機會を與へられてゐる。我々は生まれて日本民族である、日本國民である。何としても他の民族ではあり得ない、又他の國民ではあり得ない。それは偶然に日本といふ國土に生まれたが爲ではない。日本民族の血を引き、日本國民の生命を生命と

無機的結合
有機的結合

して享けてゐるからである。血は爭ふべからざるものである。血に由つてなされてゐる國民の結合は、無機的な結合ではない。有機的な結合に成れる國家は、機械的な國家ではない。爭ふべからざる血は、特殊なる民族性を作り、民族精神を作り、この民族性民族精神が有形に又無形に國家を形成してゐる。我々は、日本民族として生くる外に、生くべき道は見出し得ない。而して、國家に由つて、民族共有の生命の實現に努め、民族精神を世界に擴充するを圖ることが、我々の個人として又國民として生くべき唯一の道である。

國民の文學は國民の精神をさながらに寫した鏡である。しかるが故に、イギリス文學は英國民にとつて最も尊い文學である。フランス文學は佛國民にとつて最も大切な文學である。ドイツ文學は獨國民にとつて最も愛すべき文學である。我々日本國民にとつては、日本文學の外に世界の何處にも、より以上に尊い大切な愛すべき文學はあり得ない。我々は、自己の生命を他人のそれに比較して之を評價するやうな、自己に冷酷な所爲はしたくない。我が國民精神の表現である國文學を、外國文學に比較はしても、その價値の比較には及びたくない。よしそれが高く評價されようと、低く評價されようと、國文學は我々日本國民の爲には唯一のものであり、如何ともし難いものである。我々はその本質を究め、益々これを充實せしめ展開せしめることに努めればよい。又それより外になすべき道は持たない。我々は、我々に生命の力を與へてくれる二千年來の歌人・物語作者・隨筆日記の筆者・軍記物語の著者

から、近世の各種様式の文藝作家達に、心からなる尊敬を捧げたい。そしてそれと同時に、古典文學の筆寫・蒐集・整理・訓點・註釋・批評の業に從事して、我々に古典文學に親しみ得べき便宜を與へてくれた國文學者達にも、同樣の敬意を保ちたい。

文學に國境は無いやうにいふ人もある。或程度までは承認さるべき事である。併し又一面から言へば、民族的・國民的の血の色の鮮やかなものは文學である。國語は國民の內にその職能を全うするばかりでなく、その國語を解するものには、外國人にも同樣に、その職能を盡くし得る。とはいへど、單語・文章の持つ意味はとにかく、その中に脈打つてゐる全精神を些かの遺漏なく理解し得るものは、その國民を措いては決してあり得ない。かるが故に、イギリス文學は英國民をして

研究せしめ、フランス文學は佛國民をして研究せしめ、ドイツ文學は獨國民をして研究せしむるが、最も適當であることに論はないが、民族關係の複雜であり、國際交渉の古來久しく、國語組織の甚だ相似た西洋諸國民の間に於ては、外國人で他國文學を研究する事も妨げないかも知れない。併し、我々のやうに特殊な民族性を有し、特殊な國家を有し、世界の國際關係から久しく隔絶されて、特殊な生活を營んで來た國民の文學、系統を異にした特別な組織を持つてゐる國語に表はされた文學は、特に國民的の色鮮やかなものであることは言ふまでもない。隨つて我が國文學の研究は、獨り我々日本國民のみ成し得べき業ではあるまいか。

我が國民の過去を振返つて見ると、亞細亞大陸地方から、支

那や印度の先進文化を始めて我が國に輸入したのは、遠い昔の事である。その時代に於ては、我が國民はまだ素樸の狀態に在つたから、彼の國の文化の燦爛たる光輝に接しては、驚異から羨望崇拜の心を向けて、熾んに之を輸入し模倣した。內なるものを省みてよく之を育てるに遑なく、彼に學ぶ事に努めた。制度に於て、服飾・家屋に於て、藝術に於て、彼の影響・感化を受けた所は甚だ多かつた。學問・思想・文學に至る迄、追隨と模擬とに力を致してゐた。之が爲に、當時の文化は國民の獨創力の甚だしく缺乏したものとなつてゐた。かくして國家を支配した政治の實權は、貴族階級から武士階級へ移り、王朝時代・武士時代と時代は變つて行つたが、外國崇拜の精神は絕えず續き、拜外の迷夢は依然として國民の間に覺めなかつた。

酣醉

耳朶

本然の性

偶、江戸時代に至り、徳川幕府は外國交通の道を杜絕したけれども、多年彼の感化を受けてゐた國民は、相變らず拜外の夢に酣醉を貪つてゐたが、その時代の精神の中から、ゆくりなく復古の唱道の聲が聞え出した。「古に復れ」といふ聲が、天籟の如く國民の耳朶に響いて來た。復古の精神は、昔の儘の社會を再び此の地上に現はさうとする精神ではない。古代の素樸な精神の中に、人間の眞精神を見出し、日本人の眞の相を見出して、それに復らうとする精神である。長い年月の間に、知らず知らず人間性の眞から離れて來てゐる生活を、自覺的に本來の人間性に引直さうとする精神である。外國他民族の感化影響の爲に晦まされた民族特有の精神の發揮に返らうとする精神である。「古に復れ」といふは、人間本然の性に復れ、

提唱

民族本然の相に復れといふのである。賀茂眞淵は、人間の眞の精神を萬葉集に見出して、萬葉集の研究、萬葉風の和歌を提唱し實行した。本居宣長は、日本人の眞の相を古事記に見出して、古事記傳の著述にその生涯の大部分を捧げたのである。

これ等先覺の提唱や實行に由つて、拜外の迷夢は一部破れかけたのであつたが、江戸末期に至つて外國の要求に迫られて、已むを得ず、當局は鎖國の制を撤廢して、こゝに西洋諸國との交通が開かれた。こゝに於て、西洋文化を我が國民の眼から覆うてゐた幕は切つて落されて、我が國民は再び外國文化の光に眩惑されてしまつた。國際的の地位を高め國力を増進して、彼等と世界に對立するには、先づ彼等の所有するものを我に得なければならぬと知つた敏捷な我が國民は、一千餘年前の國民がなしたと同じやうに、外國文化の輸入・模倣に努力した。さうして今日に於ては、最早その點では多く彼に劣るところなきまでに漕ぎつけたのである。拜外の精神は、對象を異にして又熾んに動き始めた。かくて夢から夢へと移り來つて、今なほこの夢を續けてゐる。此の夢の中に明治も大正も過ぎて昭和の御代となつた。

劃期的機運

世界大戰爭は、いろ〳〵の意味で世界の劃期的大事件であつた。此の事件に覺醒され刺戟されて起つた改造の機運は、今や世界に充滿して、各方面の改造、今現にその途上に在ると見ゆるのである。西洋文化の眞相が、此の大事件に由つて遺憾なく暴露されて、これに對する批判の眼が冷やかに輝き始めた。そして、明らかにその弱點を認識するに至つたのであ

る。それと共に、これまで多く閑却されてゐた東方文化が、世界の注視の的とならうとしてゐる。物質的から精神的へ、分析的から綜合的へと、學界の推移し行かうとする傾向が見え出して來た。數年前から西洋學者の東洋研究・日本研究に向ふ傾向はこれを語る事實である。

今や世界國際の關係、國民の交渉は、實に近く且つ密である。一隅を叩けば他の隅々へ直ちに響を傳へる。我が國に於ても、時を同じうして、各種改造運動と共に、古典復興・國文學研究の風潮が何處からともなく起つて來た。拜外の迷夢は先づ若い人達の中から覺めかけて來た。老年達が無自覺に拜外の鈍い空氣の中に逡巡して、舊習舊慣の保守に腐心してゐる中に、却つて若い人達の中に自覺的な活動・思索がいろ〳〵と

復古精神

起りかけてゐる。改造の聲の中に、外國の束縛を脫して、自國民の生命を擴充して行かうとする聲が聞かれる。この強い精神は、老人達の中でなくて若い人達の中に聞かれる樣になつた。新忠君論・新愛國運動は、若い人達を中心として起つたものではあるまいか。自國を凝視し、日本國民自身の眞の相を見出さうとしてゐる熱意は、たしかに若い人達の中に動きはじめたものである。この熱意は、少數專門學者の提唱宣傳に基づく一時的の現象ではあるまい。それは若うして西洋文化の研究に功を積んだ人達の間に、かゝる機運の動いてゐる事實に徵しても知ることが出來ると思ふ。

此の機運は、これを一言に纏めれば、復古精神の勃興である。「古に復れ」「日本國民のその元に復れ」「外國精神の束縛を脫せよ」

荷田春滿　江戸時代の國學者、元文元年（二三九六）歿、年六十九。

平田篤胤　羽後國（秋田縣）の人、國學者、天保十四年（二五〇三）歿、年六十八。

因襲

いびつ

といふ精神である。荷田春滿や賀茂眞淵が二百年前に唱へ出して、本居宣長や平田篤胤等に繼承されて、大いに國民を警醒し、明治維新の大業を成就した根本を培養した精神と同様の精神である。それが今こゝに又繰り返されてゐるものといへる。江戸時代の復古主義者には、世界知識の狭かつた爲に、固陋な偏見に捉へられた弊があつた。今日の復古精神には、此の如きものを含んではならない。復古精神は、舊い昔の社會や生活をさながらに今日に移さうといふのではない。古代生活や古代文化の中に見出される人間の眞の精神、日本國民の眞の相に復歸しようとする精神であらねばならない。因襲の世界から本然の世界へ、いびつの世界から正しき世界へ、虚僞の世界から現實の世界へ復らうとする精神であらねばならない。而して、かゝる人間の眞の精神、日本國民の眞の相は、これを古典文學の世界に見出すべく、本然の世界・正しき世界・眞實の世界はこれを文學の中に見出すべきであるから、復古精神には古典への憧憬・國文學探究の精神の伴なふを常とするのである。斯様にして、復古精神の勃興、古典復興の新現象に促されて、國文學の眞の光が次第に世に出でつゝあるの事實を見るのではあるが、なほ我々學徒の爲に殘された未開墾の荒蕪地も少なくないし、新考察新研究に遺された餘地は、極めて多いのである。獨り學者研究の餘地が多く遺されてゐるばかりでなく、民衆理解には更に多くの餘地の存することを思ふのである。專門學者の努力は、その方に向つても前途遼遠の感を免れないのである。

（日本文學講座）

御堂　法成寺、寛仁三年(一六七九)藤原道長の創建、址は今の京都御所の東隣。

攝政殿　藤原頼通、道長の子。

殿　藤原道長。

叶ふべきな(る)めり

なべてのさまにやはおはします

九　法成寺の造營

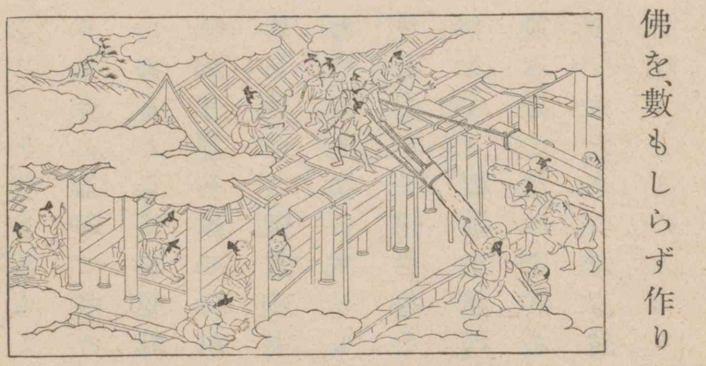
今は御心地例ざまになり果てさせ給ひぬれば、御堂のこと思し急がせ給ふ。攝政殿、國々迄さるべき公事をばさるものにて、まづこの御堂の事を先につかうまつるべき仰せ言のたまふ。殿の御前も、このたび生きたるは別事ならず、この願叶ふべきなめりとのたまはせて、他事なくたゞ御堂におはします。方四町をこめて大垣にして瓦葺きたり。さま〴〵に思しおきて急がせ給へば、夜の明くるも心許なく、日の暮るるも口惜しう思されて、夜もすがらは、山を疊むべきやう、池を掘るべきやう、木を栽ゑなめさせ、さるべき御堂々々、方々様々造り續け、御佛はなべてのさまにやはおはします、丈六の金色の

馬道

安きいも大殿どもらず

地子・官物

佛を、數もしらず作りなめ、そなたをば北・南と馬道（めだう）をあけて、道を整へ造らせ給ひて、廊・渡殿かずおほく作らせなんど思し給ふに、雞の鳴くも久しく思され、宵・曉の御行も怠らず、安きいも大殿どもらず、唯この御堂の事のみ深く御心にしませ給へり。日々に多くの人々參りまかで立ちこむ。さるべき殿ばらをはじめ奉りて、宮々の御封・御莊どもより、一日に五六百人・千人の夫（ぶ）どもを奉るにも、人の數おほかることをばかしこきことに思したち、國々の守ども、地子（ちし）・官物はおそな



法成寺の造營

木賊

椋の木

はれども、只今はこの御堂の夫役・材木・檜皮・瓦など多く參らすることを、我も我もと競ひつかうまつる。おほかた近きも遠きも參りこみて、品々方々あたり／＼につかうまつる。

あるところを見れば、御佛つかうまつるとて、佛師ども百人ばかり並みゐてつかうまつる。同じくはこれこそめでたけれと見ゆ。御堂の上を見上ぐれば、工匠(たくみ)ども二三百人のぼりゐて、大きなる木どもには大綱をつけて、聲を合はせてえさまさと引き上げさわぐ。御堂の内を見れば、佛の御座作りかゞやかす。板敷を見れば、木賊・椋の葉などして、四五十人手毎に、並みゐてみがき拭ふ。檜皮葺・壁塗・瓦作なども數をつくしたり。また、老いたる翁などの、三尺ばかりなる石を、心にまかせて切りとゝのふるもあり。池を掘るとて四五百人おりたち、

榑

大津・梅津　大津は近江國（滋賀縣）、梅津は山城國（京都府）、共に材木の集散地。

西は東　西、梅津、東、大津で、東西同じの意。

須達長者　佛在世の時の舍衞國の富者。

作りけむ…ありけむ

冬の室　淨飯王、太子ノ爲ニ三時殿ヲ作ル、一ハ暖殿、以テ隆冬ニ擬ス、第二涼殿、夏暑ニ擬ス、其ノ三殿ハ春秋二時ノ寢息ニ擬ス。（佛本行集經）

勝ら－せ－給（へ－り－）と－見え－させ－給－ふ－に…

山をたゝむとて五六百人のぼりたち、又、大路の方を見れば、力車に、えもいはぬ大木どもに綱をつけて叫びのゝしりて、引きもてのぼる。鴨川の方を見れば、筏といふものに榑(くれ)・材木を入れて、棹さして心地よげに謠ひのゝしりて上るめり。大津・梅津の心地するも、西は東といふことはこれなりけりと見ゆ。磐石といふばかりの石を、はかなき筏にのせてゐて來れど、しづまず。すべて色々樣々いひつくし、まねびやるべき方なし。かの須達長者の祇園精舍作りけむもかくやありけむと見ゆるを、冬の室・夏の殿、おの／＼ことごとなり。

かゝる御勢にそへて、入道せさせ給ひて後は、いとゞ勝らせ給へりと見えさせ給ふにも、猶なべてならざりける御有樣かなと、近う見奉る人は尊み、遠う見奉る人は遙かに拜み參らす。

天王寺　攝津國（大阪府）四天王寺。

王城より　法成寺は宮城の東にある。

いとこそは・・給ふなれ

榮華物語　四十卷、著者不明、宇多天皇から堀河天皇に至る凡そ二百餘年間の歴史物語。

今は、この御堂のあたりの木・草ともならむと思へる人のみ多かり。そなたざまに赴けば、海の浪もやはらかにたちて、この御堂のものを持て運ばせ、河も水すみて、快く浮かべもて參ると見ゆ。なほなべてこの世の事とは見えさせ給はず。まづは、先年に長谷寺にある僧の、御祈禱（いのり）をいみじうして寢たりける夢に、大きにいかめしき男の出で來て「何かかく殿の御事をばともかくも申し給ふ。弘法大師の、佛法興隆のために生まれ給へるなり」とぞ見えさせ給ひける。また、天王寺の聖德太子の御日記には、「王城より東に佛法弘めむ人を我と知れ」とこそは、書きおかせ給ふなれ。いづれにても、おろそかならぬ御事なり。

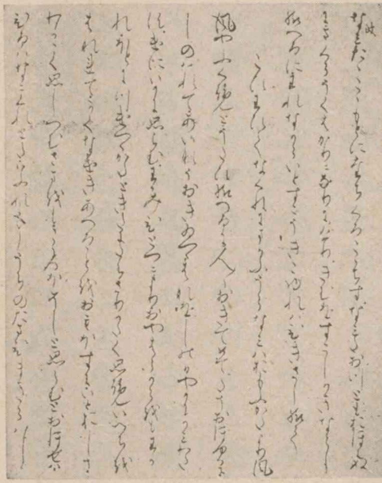
（榮華物語）

心盡くしの秋風　木の間より漏りくる月のかげ見れば心盡くしの秋は來にけり　讀人不知（古今集）

關吹き越ゆる　旅人は袂涼しくなりにけり關吹き越ゆる須磨の浦風　在原行平（續古今集）

枕浮くばかり　ひとり寢の床にたまれる涙には石のまくらもうきぬべらなり（古今六帖）

一〇　須磨の秋風



源氏物語（河内本）

須磨には、いとゞ心盡くしの秋風に、海は少し遠けれど、行平の中納言の、關吹き越ゆるといひけむ浦波、よる〳〵はげにいと近く聞えて又なくあはれなるものは、かゝる所の秋なりけり。御前にいと人少なにて、うち休み渡れるに、一人目を覺まして枕を欹てて四方の嵐を聞き給ふに、波たゞ此處もとにたち來る心地して、涙落つとも覺えぬに、枕浮くばかりになりにけり。琴を少しかき鳴らし給へるが、我ながら

あいなし

人々の語り聞えし海山　源氏わらはやみにて北山に詣でた時、人々、國々の勝景を語り聞えた。（源氏物語若紫の巻）

いとすさまじう聞ゆれば、彈きさし給ひて、

　戀ひわびて泣く音にまがふ浦波は思ふかたより風や吹くらむ

とうたひ給へるに、人々おどろきて、めでたう覺ゆるに、忍ばれで、あいなう起きつゝ、鼻を忍びやかにかみわたす。

げに如何に思ふらむ、我が身一つにより、親・兄弟片時たち離れ難く、ほどにつけつゝ思ふらむ家を別れて、かく惑ひあへると思すに、いみじくて、いとかく思ひ沈む樣を、心細しと思ふらむと思せば、晝は何くれとたはぶれごと打宣ひ紛らはし、つれづれなる儘に、いろ／＼の紙をつぎつゝ、手習をし給ひ、珍らしきさまなる唐の綾などに、さま／＼の繪どもをかきすさび給へる屛風のおもてどもなど、いとめでたく見所あり。

千枝　姓不詳。

常則　飛鳥部常則、古今著聞集に繪に巧であつた事が出てある。

前栽

なよゝか

紫菀色

源氏物語　五十四帖、一條天皇の時（一六四七—一六七一）紫式部の著した小說。紫式部—平安朝中期の文學者、一條天皇の皇后上東門院に仕ふ、歿年未詳。

人々の語り聞えし海山の有樣を、遙かに思しやりしを、御目に近くては、げに及ばぬ磯のたゝずまひ、になくかき集め給へり。「此の頃の上手にすめる千枝・常則などを召して、作繪仕うまつらせばや」と、心もとながりあへり。なつかしうめでたき御有樣に、世の物思ひ忘れて、近う馴れ仕う奉るを嬉しき事にて、四五人ばかりぞつと侍ひける。前栽の花いろ／＼咲き亂れ、おもしろき夕暮に、海見やらるる廊に出で給ひて、たゝずみ給ふ御さまのゆゝしう淸らなるに、ところがらは、ましてこの世のものとも見え給はず。白き綾のなよゝかなる紫菀色など奉りて、こまやかなる御直衣、帶しどけなくうち亂れ給へる御さまにて、「釋迦牟尼佛弟子」と名のりて、ゆるゝかによみ給へる、また世に知らず聞ゆ。

（源氏物語）

二　謠ひもの

一　神樂歌

榊

本

榊葉の　香をかぐはしみ　とめくれば　とめくれば　八十氏人ぞ　まどゐせりける　八十氏人ぞ　まどゐせりける

末

神垣の　みむろの山の　榊葉は　榊葉は　神のみ前に　茂りあひにけり

二　催馬樂

飛鳥井

あすかゐに　あすかゐに　宿りはすべし　オケ　蔭もよし　かげもよし　みもひも寒し　御秣(みまくさ)もよし。

老鼠

西寺の　おいねずみ　若鼠　御裳つんづ　袈裟つんづ　けさつんづ　法師に申さむ　師に申せ　法師に申さむ　師に申せ

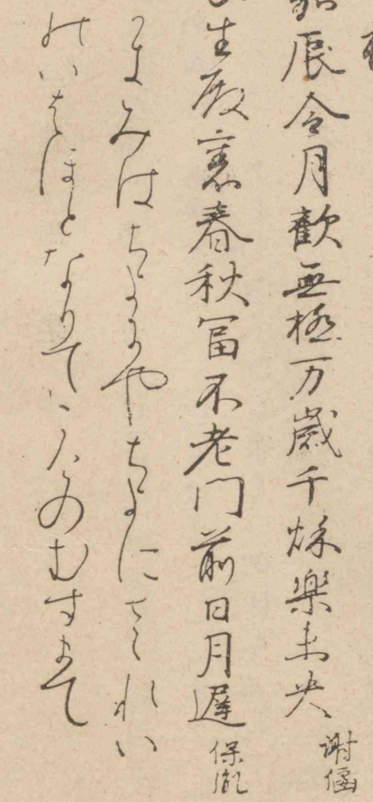
三　朗詠

祝　　謝偃

嘉辰令月歡無極　萬歲千秋樂未央

長生殿裏春秋富 不老門前日月遲　保胤

わが君は千代に八千代にさゞれ石のいはほとなりて苔のむすまで　讀人知らず



倭漢朗詠集抄寫

早春

氣霽風梳新柳髮 氷消浪洗舊苔鬚　都良香

いはそゝぐ垂氷の上の早蕨の萌えいづる春になりにけるかな　志貴皇子

山家

山路日暮滿耳者樵歌牧笛之聲 澗戸鳥歸遮眼者竹煙松霧之色　紀齊名

山里は物のさびしきことこそあれ世のうきよりは住みよかりけり　讀人知らず

四　今様

萬劫年ふる

萬劫年ふる龜山の　下の泉のふかければ
苔むす岩屋に松生ひて　梢に鶴こそ遊ぶなれ

一天四海

一天四海のうちのみか
治まり靡く時なれや　唐土が原もこのところ
人の國まで日の本の

武田祐吉　東京市の人、明治十九年生、國文學者、文學博士、國學院大學教授。
高市　奈良縣高市郡。
十市　奈良縣磯城郡。
磯城　奈良縣磯城郡。

三　大和國原

武田祐吉

日本文學は、日本群島に居住した民族の間に發生し生育した文學であるが、古代にあつては、いまだ各種族が融合せずして分布し、その中、特に大和の國に居を占めたものが有力な文化を釀成し、その所有する文學が遂に日本文學の主流を成すに至つた。かくて大和の國は永い間文化の中心となり、現存せる上代文學に關する諸文獻は、おほかたこの地に於て成立した。

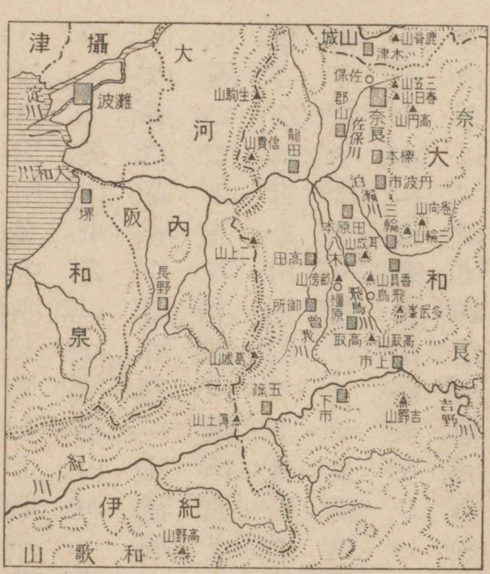
神武天皇が皇居を畝傍山の東南、橿原の地に奠められてから數十代、千三百餘年の間、歷朝おほむね大和の中央部なる高市・十市・磯城の三郡に都せられた。

飛鳥川の淵瀬
世の中は何か常なる飛鳥川昨日の淵ぞ今日は瀬になる（古今和歌集）

當時の皇居は、一代ごとに處を移して宮殿を營むのであつたから、その造營も簡單であつた。皇居の所在地は必ずしも都邑を成さず、人々は彼方此方に集團して住居し、皇居はその集團の散在してゐる範圍内に於て移動した。かくて南方から大和川に流れ入る泊瀬(はつせ)・飛鳥(あすか)・曾我諸川の流域に住居した人人の間に、原始文藝は養育せられたのである。泊瀬川・飛鳥川などの流域は、今とは異なつてゐたであらう。これらの川は土砂を押流すので、大雨の後などには、もとの河床が高く涸れてあらぬ處に濁流の漲るのが常であつて、飛鳥川の淵瀬は古來變り易きものとされてゐたが、香具山の麓に海原の如き埴安の池が出來たのも、多武峯(たふのみね)から流れ落ちる倉梯川(くらはしがは)のいたづらであつたであらう。

鼎立

飛鳥川の東に天の香具山・耳成山、西に畝傍山が鼎立してゐる。いづれも平野の中に孤立した美しい山である。畝傍は他の二山に比べて形が鋭い。この山の附近は、昔から森林であつたと思はれる。耳成は形がなだらかである。古來山中に梔子(くちなし)の樹があることで有名であつたが、今も猶少しは存してゐる。天の香具山は、その背後に高い山を控へてゐるので、やゝ目立たない。しかし古代から最も人々と



奈良附近圖

交渉の多かつた山で、神事にはこの山から眞榊を根こじにし、またこの山の土を取つて齋瓮を作つた。

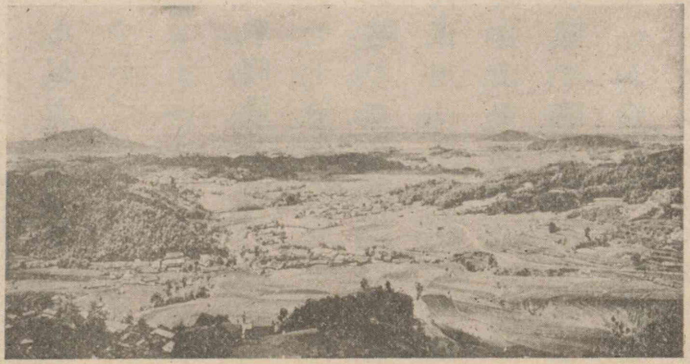
この三山を中心とする土地一帶が、古代文化の中心地であつた。更に東方には、三輪山から續いて泊瀨の山々が聳え、南には多武・高取の山、西方には葛城の連嶺が雲を凌いで、大和川を隔てて北方の生駒山脈に連なつてゐる。また多武・高取の彼方には吉野川を隔てて吉野の群山がそゝり立つてゐる。

北方のみはやゝ開けて、奈良郡山の平原を控へてゐるが、それもその末には奈良山が霞をひいて遮つてゐる。かやうに四方山を以て圍まれた土地であるから、氣候は溫和であるが、寒暑の差はやゝ激しい。昨日まで青葉の茂つてゐた山も、一夜の雨に黃葉してしまふやうに感じられることも少なくない。

晴れて雲の退くまゝに、仰ぎ見れば、遙かなる吉野山に今朝は雪の白きを見る。月は卷向の弓月が嶽から出て、玉くしげ二上山に沈む。

この平和の鄉に、古聖帝は皇居を定められた。人々の溫和な心は、そのかみの埴輪の眼鼻にも偲ばれる。

往古は天皇御一代ごとに宮室を更へられ、中に仁德・孝德兩天皇の難波の都の如き、他の國に都せられたこともないではなかつたが、他はおほむね大和の國內に皇居を定められ



大和平野

藤原　奈良縣磯城郡香具山の山麓に在つたといふ。

た。　天智天皇ひとたび都を近江の大津の宮に都し給ひ、大陸の文物に摸して都制漸く宏大となつたが、天武天皇に至つてふたたび大和の飛鳥の地に都し給ひ、ついで持統天皇は藤原の地に都宮を造營せられた。

元明天皇の和銅三年、天皇は都を大和國最北の平原に遷し、こゝに平城宮を造營せられ、爾來七代七十餘年の間帝都として榮えた。　この地は南方は大和川を隔てて飛鳥・藤原の平野に接し、東には春日山・高圓山があり、佐保川はその溪谷の水を併せ南流して大和川に注ぐ。　北は奈良山を隔てて山城の國に接し、西は生駒の山脈を以て河内の國に隣してゐる。　その氣象や風光は三山の地方と大差はないが、時の人は山遠き都と稱して、天空の開闊を喜んだ。　もゝしきの大宮人は、佐保の

古事記　三卷、神代から推古天皇の御代までの事蹟を記した歴史書。

日本書紀　三十卷、神代から持統天皇の御代までの事蹟を漢文で記した歴史書。

懷風藻　一卷、我が國最初の漢詩集。

山近き恭仁の宮　今つくる久邇の都は山河のさやけき見ればうべ知らすらし。（萬葉集）

恭仁　相樂郡（京都府）木津町の古稱。

あをによし　青丹よし寧樂の都は咲く花のにほふがごとく今盛りなり（萬葉集）

香具山の　萱草わが紐に付く香具山の故りにし里を忘れじがため（萬葉集）

内に邸宅を連ねて、馬醉木散る高圓の野邊に遊び、大君の三笠の山の親しき姿を仰ぎ見つゝ、ひたすら唐代の文物の移入に努めた。　古事記・日本書紀は成り、懷風藻は編せられ、律令は再び改修せられた。　萬葉集の前身である幾多の歌集も、恐らくはこの時代の前半に成つたであらう。　やがて都會文明は爛熟して、文藝に對する心持は貴族的遊戲的に墮落していつた。この間、時に都を山近き恭仁の宮、難波の京に移したこともあつたが、それも長くはなくて、またもとの平城の京に還つた。時代はもう都を遷すにはよほど面倒な事情を伴なふやうになつてゐた。

あをによし奈良の都は咲く花のにほふが如しと歌はれてゐる。　香具山のふりにし里は鶉鳴く里と荒れたけれども、夏

草の茂みを分けて草深百合の花咲(ゑ)みに咲めるを尋ぬる人もあらう。それから高取の山を越えると、山峡の間を流れて吉野の川はとほじろく西に走る。後の吉野朝の花は山上であつたが、萬葉人の遊んだのは川の畔であつた。鮎子さばしる瀧つ河内に離宮を建てられたのは昔からの事で、天武・持統二天皇以後、屢〻この宮に行幸せられた。

萬葉人はまた、葛城山の麓なる巨勢(こせ)の野を通つて吉野川の溪谷に出る。それから下ると、眞土(まつち)の山を越えて紀伊の若の浦へ出る。奈良から難波への往還は、生駒山脈を越える。峯の上に匂へる花を仰ぎ見つゝ、風な吹きそと龍田の神に言擧(ことあ)げして峠に出れば、まかゞやく難波の海である。四國・九州へ、さては唐土への船舶は、その岸の住吉の神に祈つて、眞楫(まかぢ)しゞ

鶏鳴く里　鶏なく古りにし郷の秋萩を思ふ人どち相見つるかも（萬葉集）

さばしる

龍田の神　生駒郡（奈良縣）三郷村に在る龍田神社。

住吉の神　大阪市住吉區に在る住吉神社。

ぬき漕ぎ分れるのである。奈良から北へ奈良坂を越えると、泉川の清流は鹿脊山の間を流れて來る。ちばの葛野(かづぬ)の國、さてはさゝなみの近江の國へは、これから通ずるので、北國への旅には必ず越えねばならぬ峠である。

昔こそ難波ゐなかと言はれけめ今は都引き都びにけり

大君の敷きます時は卽ち都である。大御心が一旦その地を離れて北へ奈良坂を越え給へば、さしも、とことはにと思ひ定めて作らしし奈良の都も衰へて、わづかにその東部のみが、興福寺の勢力のもとに蹈みとゞまる。これが現在の奈良市である。

たちかはり古き都となりぬれば道の芝草長く生ひに

泉川　今の木津川、京都府相樂郡綴喜郡を流れて淀川に入る。

昔こそ　萬葉集にある歌。

興福寺　法相宗の大本山の一、奈良市の中央に在る。

たちかはり　萬葉集にある歌。

大極殿　大内裏八省院の中央にあり、朝政を嘗し又大禮を行はせられた所。

けり

これは天平の中頃に、都を一時奈良から山城の恭仁に移した當時の作である。今の奈良に旅する人は、麥圃の間にそのかみの平城宮の大極殿の礎石の遺存するのを見て、また同じ感慨に浸るであらう。しかし工作物は亡びても、いにしへ人の生活の蹤は儼として殘つてゐる。いにしへ人の殘した文藝の力は、たやすく吾人の心の上にいにしへ人の心を呼び起さしめる。我が文化の故郷を偲ぶ者にとつては、大和の國の一草一石も意味のある存在である。

（上代日本文學史）

天皇　景行天皇、第十二代。
御子　日本武尊。
小碓命　日本武尊の御名。
まつろふ

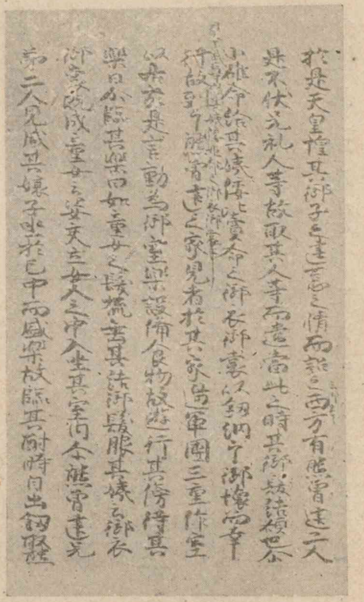
一三 倭建命

こゝに天皇その御子小碓命に詔りたまはく「西の方に熊襲建二人あり。これ伏はず、禮なき人どもなり。かれその人どもを取れ」とのりたまひて遣はしき。此の時にあたりて、その御髪額に結はせり。こゝに小碓命その姨倭姫命の御衣・御裳を賜はり、劒を御懷ろに納れて幸しき。

かれ熊襲建が家に到りて見たまへば、その家の邊に軍三重に圍み、室を作りてぞ居りける。こゝに「新室樂せむ」と言ひ動みて、食し物を設け備へたりき。かれその傍を遊行きて、その樂する日を待ち給ひき。こゝにその樂の日になりて、その結はせる御髪を童女の髪のごとけづりたれ、その姨の御衣・御裳を

な……いそ

服して、すでに童女の姿になりて、女人どもの中に交りたちて、その室の内に入りゐましき。こゝに熊襲建兄弟二人、その孃子を見めでて己が中に坐せて、盛りに樂げたり。かれその酣なるときにいたりて、御懐ろより劒を出して、熊襲が衣の衿を取りて、劒もてその胸より刺し通し給ふ時に、その弟建、見畏みて逃げ出でき。乃ちその室の椅の本に追ひ至りて、その背を取らへて、劒もて尻より刺し通したまふ。こゝにその熊襲建まをしつらく、「その御刀な動かし給ひそ。僕申すべき事あり」とま



眞福寺本古事記

纏向之日代の宮　大和國(奈良縣)磯城郡纏向村に在つた景行天皇の宮殿。

大帶日子淤斯呂和氣天皇　景行天皇。

古事記　三卷、神代から推古天皇の御代までの事蹟を記した歴史書。元明天皇の和銅五年(二三七二)正月二十八日太安萬侶が撰錄した。太安萬侶—文武・元明・元正の三天皇に仕へた歴史家、養老七年(一三八三)歿。

をす。かれ暫し許しておし伏せたまふ。こゝにまをす「汝が命は誰にますぞ」「吾は纏向之日代の宮にまし〳〵て、大八島國知ろしめす大帶日子淤斯呂和氣の天皇の御子、名は倭男具那の王にます。おれ熊襲建二人伏はず禮なしときこしめして、『おれをとれ』とみことのらして遣はせり」と、詔りたまひき。こゝにその熊襲建「信にしかまさむ。西の方に吾二人を除きて、建く强き人無し。然るに大倭の國に、吾二人にまして建き男は坐しけり。こゝを以て吾、御名を獻らむ。今より後倭建の御子と稱へまをすべし」と、まをしき。この事まをし訖へつれば、卽ち熟苽のごと振り析きて殺し給ひき。かれその時よりぞ御名を稱へて、倭建の命とまをしける。

(古事記)

島木赤彥　本名久保田俊彥、長野縣の人、歌人、大正十五年歿、年五十一。

節奏

軒輊

一四 歌の響

島木赤彥

短歌に於ける表現は、單に言語の意味の上に現はれて、それで足りるとすることは出來ません。表現しようとする感動が、各語の響や、それを聯ねた全體の節奏の上に現はれて、始めて一首の生命を持ち得るのであります。歌の言語の響・節奏、これを歌の調べ・調子、若しくは聲調・格調といひます。

我々の感動は、のび〳〵と働く場合、ゆる〳〵と働く場合、切迫して働く場合、沈潛して働く場合といふやうに、個々の感動に皆特殊の調子があります。その調子が、宛らに歌の言語の響や全體の節奏に現はれて、始めて表現上の要求が充たされるのであります。この調子の現はれは、意味の現はれと相軒輊するところのない程、短歌表現上の重要な要素になるのでありまして、古來よりの秀作は、皆、歌の調子が作者感動の調子と快適に合つてゐる爲に、永久の生命を持つ程の力となつてゐるのであります。例へば、柿本人麿歌集中にあるといふ。

あしびきの山川の瀨の鳴るなべに弓月が嶽に雲立ちわたる　（萬葉集卷七）

の歌について言ひましても「山川の瀨の鳴るなべに」と、一氣に進んで第四句を呼び起すところに、生動の趣を生ずるのでありまして、この「なべに」といふ濁音を含んだ第三句が、第四句二箇の濁音と相俟つて、山川の景情生動の趣をなしてゐる勢は、之を他の如何なる句法を以てしても換へることの出來ないものであります。これは勿論「なべに」の持つ意味より來る

柿本人麿歌集　歌は萬葉集に引かれてゐるが、原形は傳はらない。

あしびきの

弓月が嶽　奈良縣磯城郡纏向村に在る。

萬葉集　二十卷、歌數四千五百十六首、奈良朝時代に成つた歌集。

力もあるのでありますが、響から來る力と、その響の全體の節奏に及ぼす影響が大きいのであります。殊に、第一・二句に於ける「の」の疊用を受けて「鳴るなべに」と押進んで行く勢を想ふべきであります。第四・五句は、之に對して更に非常の力を以て据わつてゐるのでありまして、金剛力を以て前句を受け且つ結んでゐるといふ概があります。この力も、主として調子の上に現はれてゐるのでありまして、第五句二五音が、主として力の中心となつてゐます。試みに、第五句を「雲ぞ立つなる」「白雲立つも」などの三四音・四三音としたらどうでありませう。歌の力が滅茶々々に碎けてしまふでありませう。歌の命が內容や材料になくて、調子にある事が分ります。この歌は、實に、山河自然の景物に對して作者の心中に動いた寂寥感が、徹

象山　奈良縣吉野郡中莊村大字喜佐谷の山。

こゝだ

山部赤人　聖武天皇の頃の人、萬葉歌人として人麿と併稱される、生歿年未詳。

底して一首の調子に現はれてゐるのでありまして、かやうな歌によつて歌の調子を會得することは爲になると思ひます。

これは多分人麿の歌でありませう。

み吉野の象山(きさやま)のまの木(こ)ぬれにはこゝだもさわぐ

鳥の聲かも　（萬葉集卷六）

これは山部赤人の歌であります。「山のま」は「山の際」「木ぬれ」は「木の末(うれ)」、「こゝだ」は「許多」の意であります。この歌、山河自然の風物に對してゐる境地が、前の人麿の「あしびきの山川の瀨の」の歌によく肖てゐるのみならず、「み吉野の象山のまの」と、「の」を疊用して初句を起してゐる手法までもよく肖てゐるのでありますが、第三句以下に至つて、全く前者と異なる感動を現はすに至つてゐます。これは、前の人麿の歌の、第四句に至つて

雄渾

突然山の名を提示し來つた勢に比して「み吉野の象山のまの木ぬれには」と呼びかけた句法が、直ちに第四句以下と相聯つて、一首を直線的に押進めてゐるからでありまして「こゝだもさわぐ鳥の聲かも」の四三音・三四音の諧調が、人麿の「弓月が嶽に雲立ちわたる」の七音・二五音の諧調と、自ら別趣の勢をなしてゐます。人麿のあの歌は、人麿の雄渾な性格に徹して、おのづから人生の寂寥所に入つてゐます。赤人のこの歌は赤人の沈潛した靜肅な性格に徹して、同じく人生の寂寥所に入つてゐます。入つてゐる所は同じであつても、感動の相（すがた）は、個性の異なるがまゝに異なつてゐるのでありまして、それが自然に歌の調子に現はれるのであります。尚、この赤人の歌で、上句を受ける第四・五句に重々しい響を持つた詞の多いといふ

吉野山の離宮　奈良縣吉野郡國樔村大字宮瀧に在つた。

ことが、讀者の感動を異常な所に誘つて行く力になつてゐることを、注意すべきであらうと思ひます。

ぬば玉の夜の更けぬれば久木（ひさぎ）生ふる清き川原に千鳥しば鳴く　（萬葉集卷六）

これも赤人の歌で、前の歌と同時に吉野山の離宮で作つた歌でありまして、靜肅な感動とその感動の現はれが、前の歌と通じてゐる所があります。「ぬば玉の夜の更けぬれば」と押して行く勢が既に異常でありまして、澄み入つた世界へ誘ひこまれる心地がいたします。それを三句から五句まで連續した句法でうけて、最後に「千鳥しば鳴く」と引緊つた音を以て結んでゐます。暢達の姿があつて、輕い滑りになりません。各音の含む響が虔（つゝま）しく緊つてゐるためでありませう。この歌は

天の香具山　奈良縣磯城郡香久山村に在る、大和三山の一。

持統天皇　第四十一代。

前の歌と共に、赤人の傑作といふべきであらうと思ひます。

　春すぎて夏きたるらし白妙のころもほしたり天の香具山　（萬葉集卷一）

持統天皇の御歌として知られてゐます。第二句と第四句とで切れてゐるために、調子が落著いて、初夏の心持が現はれてゐます。第五句の名詞止も、この場合よく据わつて、動かせない重みを持つてゐます。秀作であると思ひます。歌の命は、大抵第五句で定まります。第五句だけでは無論定まりませんが、少なくも、第五句の調子が輕ければ、歌全體を輕くしてしまふやうであります。これは前に擧げた歌例についても分ります。萬葉集には、字餘り句が多いのでありますが、それは大抵第五句にあるやうであります。それも、第五句の調子を重くしたいといふ自然の要求から來てゐるのであらうと思ひます。

源實朝　鎌倉幕府第三代將軍、歌人、承久元年（一八七九）歿、年二十八。

韃鞳

　今一つ、源實朝の歌を擧げます。

　大海の磯もとゞろに寄する波割れて碎けて裂けて散るかも

波の韃鞳と寄せかへす景情に對して、「割れて」といひ「碎けて」と重ね「裂けて」と疊んで、その重疊の勢を「かも」といふ強い響で結んだ力を想ひ見るべきであります。一本、第三句「よる波の」とありますが、これは必ず「よする波」と一旦踏み切らねば歌の勢を成さぬのであります。波の姿と、感動の姿と、そして其れを現はした歌の姿と、如何によく一致してゐるかを知ることが出來ませう。

以上諸例によつて、少しく歌の調子を說きましたが、心の相(すがた)が人々によつて異なり、人の心も樣々に動くのでありますから、その動きの狀(さま)が如何にして歌の調子に現はれるかといふことは、到底說き盡くせる筈がありません。唯、それが如何なる心の動きであらうとも、調子の上に緊張して現はれてをらねばならぬことは、どの歌にも通じて言ひ得る所であります。柔らかきものは柔らかきに緊張してをり、强きものは强きに緊張してをり、暢やかなるは暢やかに緊張してをらねばならぬのであります。その緊張の快適に現はれてゐるのが萬葉集でありまして、さやうな歌の調子を我々は萬葉調と唱へてゐるのであります。緊張の調子が緊張の主觀から生まれることは贅言に及びません。

（歌道小見）

一五　畝傍の山

長歌

近江の荒都を過ぐる時

柿本人麿

玉だすき　畝火の山の　橿原の　ひじりの御世ゆ
生(あ)れましし　神のこと〲　樛(つが)の木の　いやつぎ〲に
天の下　しろしめししを　空に見つ　大和をおきて
青丹よし　なら山を越え　いかさまに　おもほしめせか
天さかる　鄙にはあれど　いはばしの　近江の國の
さゝ波の　大津の宮に　天の下　しろしめしけむ
すめろぎの　神のみことの　大宮は　こゝと聞けども

大殿は　こゝといへども　春草の　茂く生ひたる
霞たつ　春日のきれる　百敷の　大宮どころ
見ればかなしも

反歌

さゝ波の志賀の辛崎さきくあれど大宮人の船まちかねつ

不盡山を望みて　山部赤人

天地の　わかれしときゆ　神さびて　高く貴き
駿河なる　不盡の高嶺を　天の原　ふりさけ見れば
わたる日の　かげもかくろひ　照る月の　光も見えず
白雲も　いゆきはゞかり　時じくぞ　雪はふりける

語りつぎ　言ひつぎゆかむ　不盡の高嶺は

反歌

田兒の浦ゆうち出でて見ればましろにぞ不盡のたかねに雪は降りける

子等を思ふ歌一首　山上憶良

瓜食めば　兒ども思ほゆ　栗食めば　まして忍ばゆ
何處より　來りしものぞ　まなかひに　もとなかゝりて
やすいしなさぬ

反歌

しろがねも黄金も玉も何せむにまされるたから子にしかめやも

短歌

わたつみの豊旗雲に入日さしこよひの月夜あきらけくこそ

天智天皇

葦邊ゆく鴨の羽交に霜ふりて寒きゆふべは大和し思ほゆ

志貴(しき)皇子(みこ)

熟田津(にぎたつ)に船乗せむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな

額田(ぬかたの)王(おほきみ)

東の野にかぎろひの立つ見えてかへりみすれば月かたぶきぬ

柿本人麿

青丹よし奈良の都は咲く花のにほふがごとく今盛りなり

小野老(おゆ)

若の浦に潮みちくれば潟を無み葦邊をさして鶴鳴きわたる

山部赤人

わが宿のいさゝ群竹吹く風の音のかそけきこのゆふべかも

大伴家持

み民われ生けるしるしあり天地の榮ゆる時にあへらく思へば

海(あまの)犬(いぬ)養(かひ)岡(をか)麿(まろ)

坪内逍遙　名は雄藏、愛知縣の人、文學者、文學博士、昭和十年歿、年七十七。

刹那の忘我

一六　藝術の三境地

坪内逍遙

凡そ、人の、其の趣味性に適合せる文學若しくは藝術に接するや、少くとも其の當座暫くは心陶然として醉へるが如きを覺ゆ。これを刹那の忘我と名づく。名畫に見入り、上手の音樂を聽き、又は面白き演劇を觀、乃至面白き小説を讀める瞬間の感じ即ち是なり。

或は、未だ曾て斯くの如き經驗なしといふ者もなきにあらざらん。然るは、其の生來の趣味性の極めて鈍きか、然らざれば其の鑑賞上の修養の、尙甚だ不足なるが爲なるべし。藝術品の高尙に過ぎたる爲に趣味を感ぜしめざる場合、若しくは見馴れ聞き馴れざるが爲に聯想起らず、隨つて深き味はひを解せず、それが爲に興を覺えざる例はあれども、如何なる藝術品に對しても何等の面白味を感ぜずといふが如きは、人の性の自然にあらず。又畫にもせよ、音樂にもせよ、詩歌・小説にもせよ、其の他の藝術にもせよ、未だ曾て如何なる種類の人間をも、恍惚たらしめしことなしといふが如きものあらば、そは名のみの藝術ならん。苟も文學若しくは藝術と稱する限りは、少くとも忘我作用程は具へざるべからざるの理なり。

遊神

輸贏

忘我以上の作用を予は遊神と名づく。こは當の藝術を鑑賞する其の刹那、其の瞬間のみ、心恍惚たるに止まらず、譬へば圍碁・將棋を好める者の輸贏に我を忘るるが如くに、其の當座幾十分時、時としては其の後二三時間、長き時は其の夜一夜、甚だしきは三日、又四日さながら夢みつゝあるが如く惘々然た

三月肉の味はひ
子齊ニ在リテ韶ヲ聞ク、三月肉ノ味ヲ知ラズ。（論語）

屑々營々

同化

一般

るをいふ。「能の後三日」とは斯くの如き經驗をいへるなり。「三月肉の味はひを知らず」といへる、はた此の種の心境を指せるにあらずや。これ蓋し藝術の供する感興の筏に乘りて、我知らず情の海に浮かび出でて、心を別天地に遊ばしむるをいふなり。屑々營々たる現實界を離れて、一種理想的なる空なる世界にさまよふをいふなり。かゝる心境に遊ばしむるを文學藝術の微妙なる作用となす。即ち忘我作用に止まれるは、其の甚だ低級なるを證す。

併しながら、藝術の眞作用は同化に至りて極まる。作用の遊神に止まれる間は、譬へば彼の安住地を悟得せざる者と一般、一たびは現實を離れたりと雖も、いつ再び現實へ復歸し來たらんも知るべからず。所謂遊神は夢裡の心境なり。藝術

別乾坤

自意識

の微妙なる力に魅せられたる間は、心暫く自我を脫して、或は飄逸なる、或は高遠なる、或は美麗なる別乾坤に遊ぶ。然れども、然るは其の夢の穩やかなる間のみ。一たび現實界の聲に覺まさるるや、美しき夢裡の幻影は忽然として消え、夢の美しかりしだけに、更に彌、現實の醜惡なるを覺ゆる事なきに非ず。

思ふに、世人大概の經驗せる所ならんが、幼少の時に在りては、如何なる奇怪なる夢と雖も、これを夢見つゝある間には、夢と心づくこと稀なるを例とす。然るにおひ／＼成長し、自意識の發達するや、日夜に心を勞することの多き爲、夢も亦圓かなる能はず。隨つて其の夢見つゝある最中だに、「これは夢なり」と心附くこと次第に多し。これ其の夢の破れ易き所以なり。恰もそれと同じき道理によりて、各自の自意識の著しく鋭敏

自然派

と成り來れる廿世紀の今日に於ては、彼の忘我・遊神を最上の作用となし、一種の美しき夢に遊ばしむることを以て能事畢れりとなすがごとき文學或は藝術は、最早人心を魅するに足らず、隨つて假令刹那の忘我に用立つとも、長き遊神には用立たざるものの如し。　現代人の多慾なるや「こは夢にはあらず、現なり」「こは虚にあらず實なり」「こは假にあらず眞なり」とまで、深く切に同感し得んことを欲するなり。　彼の偏へに技巧に依り、空想に賴る文學藝術の、今は昔時の如く歡迎せられざるは、主として此の理に基づくなり。

現實を有りのまゝに寫すといふ自然派の作品の、近來大いに持囃さるるは、固より他にも由來あれど、其の一面の理由は同じく一種の夢にはあれども、成るべく現實に似寄りたる夢

妄誕不稽

を見せて、暫く其の夢たることを忘れしめ、以て遊神の作用を持續せしめんの意の、作家の内心に潛めるに在るならん。　否、作者の心には此の意存せざることもあらん、讀者に此の底意あるや爭ふべからず。　これを惡しく解すれば、人心の次第にせゝこましくなり、夢を夢として樂しむこと能はざるに因ることなるが、又これを善意に解すれば、人の鑑賞力の著しく進みたると、其の欲望の大きく高くなれるとの爲に、忽ちにして妄誕不稽なるを看破し得らるるが如き作品を、玩賞せざるやうになれる爲なり。

それは何れにもあれ、藝術にもせよ、文學にもせよ、其の效用のなほ遊神に止まれる間は、其の果して六尺の鬚眉男子が畢生の事業と爲すに足るや否やは、頗る疑惑なき能はず。　「人生

槿花一朝の榮　槿花一日ニシテ自ラ榮ト爲ス。（白居易）

屈平　支那戰國時代楚の大夫、詩人、（前332—295）

刻苦經營

は短し、されど藝術は壽し」と西諺には言へり。然れども、こは果して古今東西幾何の藝術・文學にか適用せらるべき。英雄豪傑の偉業は槿花一朝の榮にして、幾星霜を經たる後には、空しく山岳と化し了す。ひとり文學者・藝術家の大作品は、彼の屈平らの詩賦と共に長へに日月を懸くといふ。そは果して事實なるべきか。古今東西の名篇・傑作にして今尙眞に人心を鼓吹し得るもの、果して多く世に存せりや否や。げにや、長く世に玩賞せられて一時の忘我用、若しくは遊神用に供せらるる程度のものは、東西ともに決して少なからぬことならんが、單にさばかりの效用とせば、そは果して六尺の男子が心血を濺ぎ、六十年・五十年の壽命を四十年・三十年に縮めて、以て刻苦經營すべき底の一大事なるべきか否か、甚だ疑はしといはざるべからず。宗教か、育英か、社會の改善か、政治か、實業かに携はりて、少なくとも一國一代の爲に身を獻ぜんかた、或は一段優れたる事業にはあらざるか、一段生まれ甲斐ある仕事にはあらざるか。予は斯くいへど、文學藝術は必ずしも毎に敎化を目的とせざるべからずといふにはあらず、況んや其の實用的ならんことをや。畢竟こゝには文學の目的を論ぜんと欲するに非ず、只其の作用に於て忘我遊神以上に幾段を進めて、他を同化せしむる底の魔力を具へざる間は、未だこれを以て眞の藝術的作用となすべからざるをいふのみ。

若しそれ、同化作用を有する藝術に接せんか、人は其の刹那に於て先づ悉く自我を忘じ去る、否、只それのみにあらず、其の當座幾何時かは全く現實を超脫して、さながら別天地に遊行

融會

常住界

體胖か
富ハ屋ヲ潤シ、德ハ身ヲ潤ス、心廣ケレバ體胖カナリ。（大學）

し去る感あり。　加ふるに、其の感の漸く薄らぎて自我に復歸せる後と雖も、多少我が好尙若しくは性癖の一變したる如き思あるを常とす。　すなはち穢かりし心も自然に美しく、荒々しかりし心も自然に優しく、滅入りたりし心も引立ち、快活となり、嚴肅ともなる。　一言以て評すれば、當の藝術品の內容と自家の心とが、相融會して一となるなり。　狹隘なる現實界以外に、若しくは以上に、いつしか一の常住界、安住の別天地の成立せるを意識して、何となく心に餘裕あるを覺ゆ。　所謂體胖かなる心狀態これなり。　これを藝術の同化作用となす。　さて斯くの如くにして時を經る間に、自然の勢として此の心狀態を、自家以外に推し及ぼさんと希ふの心を生ず。　こゝに至りては、逆さまに現實界を擧げて、件の藝術界にて經驗すると

勸化門

風を移し
風ヲ移シ、俗ヲ易フルニハ樂ヨリ善キハ莫シ。（曲禮）

淫哇

全然同意味のものとなさざれば、止まざらんとす。　こゝに至りては、藝術家の態度は頗る宗教家の態度と似たるものとなり、強ひて勸化門を開きても世を擧りて同一味に化せしめんと欲するに至る。

併しながら、所謂同化作用は、或は高く或は卑く、何れの方面にも向ひ、善化の用をもなせば、惡化の用をもなす。　藝術の力は能く風を移し、俗を易ふ。　彼の健全ならざる藝術の風俗を壞ることあるの理も、これを推して考ふれば、おのづから明白なり。　古の賢君明主は言ひ合はせたるが如く、樂の正雅を貴び、淫哇を惡みき。　音樂の人心を動かすことは、最も廣く且つ深ければならん。　其の理は移して以てあらゆる藝術の上に適用するを得べし。

西田幾多郎　石川縣の人、明治三年生、哲學者、文學博士、京都帝國大學名譽教授。

一七　社會的意識と國家

西田幾多郎

我々は我々の子孫と共に同一細胞の分裂に由りて生じた者である。生物は全種類を通じて同一の生物と見ることができる。生物學者は今日「生物は死せず」といつて居る。意識生活に就いて見てもその通りである。人間が共同生活を營む處には、必ず各人の意識を統一する社會的意識といふものがある。言語・風俗・習慣・制度・法律・宗教・文學等は、すべてこの社會的意識の現象である。我々の個人的意識はこの中に發生し、この中に養成されたもので、この大いなる意識を構成する一細胞に過ぎない。知識も、道德も、趣味も、すべて社會的意義をもつて居る。最も普遍的なるべき學問すらも、社會的因襲

ヘフディング　丁抹の哲學者、コペンハーゲン大學教授。(1843—1931)

を脱し得ない。今日各國に學風といふものがあるのは、これがためである。されば、所謂個人の特性といふものも、この社會的意識といふ基礎の上に現はれて來る多樣なる變化に過ぎない。いかに奇拔なる天才でも、この社會的意識の範圍を脱することはできぬ。かへつてそれらの天才は、社會的意識の深大なる意義を發揮した人々である。眞に社會的意識と何等の關係なきものといへば、狂人の意識のごときものに過ぎぬ。

右の如き事實は誰も拒むことはできぬが、さてこの共同的意識といふものが、個人的意識と同一の意味に於て存在するとして、一の人格と見ることが出來るか否かについては、種々の異論のあるところである。ヘフディングなどは、統一的意

統一的自己

識の實在を否定し「森は木の集合で、これを分てば森といふものがない。社會も個人の集合で、個人の外に社會といふ獨立なる存在はない」といつて居る。併し、分析した上で統一が實在せぬから統一がないとはいはれぬ。個人の意識でも、これを分析すれば別に統一的自己といふものは見出されないが、併し、統一の上に一の特色があつて、種々の現象はこの統一に由つて成立するものと看做されねばならぬから、一の生きた實在と看做すのである。社會的意識も、同一の理由に由つて一つの生きた實在と見ることができる。社會的意識にも個人的意識と同じ様に、中心もあり、連絡もあり、立派に一の體系がある。唯個人的意識には肉體といふ一の基礎があつて、これが社會的意識と異なる點であるが、腦といふものも決して

他愛的要素

單純な物體ではなく、細胞の集合であるから、社會が個人といふ細胞に由つて成つて居るのと違ふ所はない。

かく社會的意識といふものがあつて、我々の個人的意識はその一部であるから、我々の要求の大部分はすべて社會的である。若し我々の慾望の中から、その他愛的要素を去つたならば、殆ど何物も殘らない位である。我々の生命慾も、主なる原因は他愛にあるを以て見ても明らかである。我々は自己の滿足よりも、反つて自己を愛する者、又は自己の屬する社會の滿足に由つて滿足されるのである。元來我々の自己の中心は、個體の中に限られたものではない。母の自己は子の中にあり、忠臣の自己は君主の中にある。自分の人格が偉大となるに從つて、自己の要求はいよいよ社會的となつてくるの

典型

である。
今少しく社會的意識の階級に就いて述べて見よう。抑、我我の社會的意識には種々の階級がある。その中最少であつて直接なものは家族である。家族とは、我々の人格が社會に發展する最初の階級といはねばならぬ。男女相合して一家族を成すのは、單に子孫を遺すといふよりも、一層深遠なる精神的目的をもつて居るのである。人類といふ典型より見たならば、個人的男女は完全なる人ではない。男女を合したものが完全なる一人である。男子の性格が人類の完全なる典型でないやうに、女子の性格もまた完全なる典型ではない。男女の兩性が相補うてこそ、完全なる人格の發展が見られるのである。

併し、我々の社會的意識の發達は、家族といふやうな小團體の中にのみ限られるものではない。我々の精神的ならびに物質的生活は、總てそれ〴〵の社會的團結に於て發達することが出來るのである。家族に次いで、我々の意識活動の全體を統一して一人格の發現とも看做さるべきものは國家である。國家の目的に就いては種々の説がある。或人は國家の本體を主權の威力に置き、その目的は單に、外は敵を防ぎ、内は國民相互の間の生命財產を保護するにあると考へて居る。又或人は、國家の本體を個人の上に置き、その目的は單に個人の人格發展の調和にあると考へて居る。併し、國家の眞正なる目的は、第一の論者のいふやうな、物質的で又消極的なものではなく、又第二の論者のいふやうに、個人の人格が國家の基

礎でもない。我々の個人は反つて一社會の細胞として發達して來たものである。國家の本體は、我々の精神の根柢であり、共同的意識の發現である。我々は國家に於て、人格の大いなる發展を遂げることが出來るのである。國家は統一した一の人格であつて、國家の制度・法律は我々の共同意識の意志の發現である。我々が國家の爲に盡くすのは、偉大なる人格の發展完成の爲である。又國家が人を罰するのは復讐の爲でもなく、社會安寧の爲でもない、その人格に犯すべからざる威嚴がある爲である。

今日の處では、國家は統一した共同的意識の最も偉大なる發現であるが、我々の人格的發現は此處にとゞまることは出來ない。尚一層大いなるものを要求する。それは卽ち人類

ボーロ　基督教の使徒、偏狹なるユダヤ的基督教を世界的基督教に高む、ボーロ神學の樹立者、西曆六六年歿。

ストア學派　西曆前四世紀末希臘の哲學者ゼノンの創めたもの、倫理宗教を中心とし、義務至上の嚴肅主義、博愛的世界主義をその特色とする。

を打つて一團とした人類的社會の團結である。かくの如き理想はすでにボーロの基督教に於て、又ストア學派に於て現はされて居るのである。只この理想は容易に實現されるものではない。今日はなほ武裝的平和の時代である。

（善の研究）

阿部次郎 山形縣の人、明治十六年生、哲學者、東北帝國大學教授。

一八 生活の中心

阿部次郎

自分はすべての人に勸めるに、その生活の中心をこしらへることを以てしたい。その中心を中心として、日々の生活を調整することを以てしたい。もしその中心を發見することが容易でないならば、自分は生活の中心を求めることを以て、それまでの生活の中心とすることを勸めたい。

諸君が學校にゐる間は、學校の課程が、外部的ながら、諸君の生活に一種の中心を與へてゐる。諸君は、諸君の生活を調整すべき具體的秩序を手近に持つてゐる。

隨つて、たとひ學校をつまらないものと見る人々でも、なほこれによつて、自分の生活に一種の具體的內容の與へられて

ゐることは爭ふことはできないであらう。しかし、諸君が學校を卒業して、授業時間や、課題や練習や、試驗の束縛を脫れる時、諸君はまた一方に、何となく日々の生活に具體的內容を缺いて、退屈と空虛を覺えることを禁じ得ないであらう。學校に代はつて諸君の生活の中心となるものが、すぐには諸君の手に落ちて來ないであらう。多くの人は、學校を卒業すると共に、何かをしなければならぬ義務を他人から負はされるか、もしくは自らの感情の中に負ふを常とする。しかし、今日の社會は、我等の卒業を待ち受けてゐて、直ちに我等に適當な活動の地を與へるやうな社會ではない。さうして、自ら活動の地を造り出さうとするにも、我等は自己の內面に確かさの自信を缺き、我等の働きかけるべき社會に對する適當の知識を

缺いてゐるが故に、內外兩樣の意味に於て、どこから手をつけてい丶かわからなくなる。 かくて、焦燥と空虛とこの二つの相反したやうで相近似した感情は、手を携へて我等の生活に迫つて來る。 さうして我等はあせればあせるほど、益〻生活の中心を失つた感じに捉はれなければならない。 自分は學校を卒業すると、直ちにこの病に捉はれて、學校卒業後の二三年は、まるで何事も手につかなかつた。 さうして、この狀態を脫却するまでには、自分としては堪へ難いほどの忍耐と節制とを積まなければならなかつた。 故に自分は、諸君の卒業を送るに當つても、特にこの點に關する注意を請はなければならない。

凡そ人生は短く、人生は長い。 爲すべきものを持つてゐる

ものには、六七十年の歲月は須臾にして流れ去るであらう。 しかし、何事にも倦んだ心に取つては、五十年の壽命も、長い退屈な旅と思はれるに違ひないのである。 さうして、この短い生涯を空過しないためにも、この長い一生を退屈せずに暮らすためにも、我等には生活の中心が必要である。 自分は、中心を缺いた生活の中にある充實と幸福とを考へることができない。

そこで我等の問題は、更に一歩を進めて、いかにして生活の中心を發見すべきかといふことに移る。 この問題に對する解答も、また固より容易ではないが、自分には、その具體的方法として一つの考案がある。

といつても、それは何も珍らしいことではない。 最も自分

飯山　長野縣下水内郡飯山町。

白隱和尚　駿河國（靜岡縣）の人、黄檗宗の高僧、明和五年（二四二八）歿、年八十四。

高社　長野縣下高井郡飯山町の南。

に適しさうな人を選んで、その人の内面的發展を精細に跡附け、その通つた道を自分も内面的に通つて見ることである。約言すれば、自らそれの「師」を擇んで、自己の鍛錬をその「師」に託することである。　師の奴隸とならずに、しかも「師」を信頼して、常に「師」に照らして、自己を發見する途を進むことである。

　自分は自分たちの受けて來た纏まりのない教育と、いたづらに漠然とした廣い知識とを思ふごとに、古人の受けた鍛錬と訓育とを羨ましいと思ふ。　自分はこの春、信濃の飯山に行つて、白隱和尚修業の地なる正受庵を訪うた。　庵は高社の山を望み、千曲川を望む小丘の上にあつて、杉の老樹の生ひ繁つた幽邃な境にある。　初め白隱が惠端和尚をこの庵に訪うた時、惠端は白隱を崖から蹴落したさうだ。　白隱はそれにも懲

稟性

天性

りずに、惠端に師事したさうだ。　さうして、或日白隱が一つの悟りを得て、その坐禪の座から（彼は戸外の石上に坐して工夫を積んだといふことである）歸つて來るときに、惠端は緣の端に出て遠くから手招きをしながら、白隱を歡迎したさうだ。

　自分はその話を聞いて、白隱と惠端との間が羨ましくてならなかつた。　自分にも、自分を崖から蹴落してくれる師匠、緣側から自分を手招きしてくれる師匠がゐたら、どんなに幸福なことであらう。　師弟とは、與へられるだけ與へ、受けられるだけ受けんとする、二個の獨立せる、しかも相互に深く信頼せる靈魂の關係である。　弟子をその個性のまゝに一人の「人」とするところに、師の師たる所以があり、その稟性に隨つて、一個の獨立せる人格となるところに、弟子の最も多くその師に負

壅塞
昏迷

ふ所以がある。「道」の傳統は、何等かの意味に於ける師弟の關係を經て始めて內面的に生きるのである。

固より師に就くことは、自分の生活內容を、その師の供給に仰ぐといふことではない。我等が愛し、憎み、努め、怒る心は、我等が我等自身の中に豫め持つてゐなければならぬところである。これ等の愛憎や、喜悲は、我等の生活を刻々に新な境涯に漂はしめ、往々にして、我等の生涯を困惑と、壅塞と、彷徨と、昏迷との境に導く。この窮境を拓き、この關門を透過する努力に於て、我等は始めて「師」の忠言を必要とするに至るのである。我等が師に就いて學ぶべきところは、問題の解き方である。途の切り拓き方である。生活內容を流れ行かしむべき方向である。もし我等自身の中に、豫め生活內容を有することな

く、一定の傾向を有することなく、解決を要する問題を有することがないならば、師に就くことは、全然無意味でなければならない。故に生活の中心を求めるために、古人の著作を研究するといふ時、我等の生活の意味は、讀書にあるのではなくて、我等の內面的知覺を開拓して、これを正しい方向に導いて行くところにあることは、繰り返す迄もないことである。書を讀むことは、自ら生きることを停止することを意味するならば、また他人の著作を研究することは、自ら省みることを中斷することを意味するならば、我等は固よりいかなる場合にも、書を讀むことを、他人の思想を研究することを生活の中心とすべきではない。こゝに讀書といひ研究といひ、師に就くといふのは、自ら生き、自ら省みる爲の一つの途を意味するもの

第一義諦

偏局

であることは、明瞭に記憶して置く必要がある。　我等が師に就いて學ぶことを要する第一義諦は、行住坐臥に師の言葉を讀誦することではなくて、何よりもまづ、師と同一の勇氣を以て、人生に衝き當ることでなければならない。　自己の直接經驗を基礎として、人生の疑に觸れ、人生の疑を解く途を求めることでなければならない。

　自分は今、最も自分に適しさうな人を選んで、これを師とすべきことをいつた。　しかし、こゝに「最も自分に適する」といふのは、現在の自分が最も愛好するもの、現在の自分が最も親しみ易いもの、――換言すれば、現在の自分の程度を以ても、容易に接近し得べきものといふ意味ではないのである。　此の如き「師」は、たゞ我等をあまやかすもの、現在に於ける我等の偏局

した發展を、更に一面的に偏局せしめるものに過ぎないであらう。　現在の自分は、自分の本質の一切ではない。　我等の本質の中には、無限の可能性がある。　他日、我等の本質の中から、現在の自分には思ひも寄らぬ花が咲き出る日がないことを、誰が保證することができよう。　我等の「師」は、我等の本質の中から、これらの數多き可能性をひき出す力があるものでなければならない。　我等を鞭撻して、常により高い階段を望ましめる力を持つてゐるものでなければならない。　約言すれば、我等を叱り、我等を引上げ、我等を打碎き、我等を改造するに足るほど、複雜で偉大なものでなければならない。　この意味に於て、我等に「無理」を強ひる力のないものは、我等の師と仰ぐに値せぬものである。

（三太郎日記）

岩城準太郎　富山縣の人、明治十一年生、國文學者、奈良女子高等師範學校教授。

肺肝を吐露する　まごころをあらはす

辭令　ことばづかひ

一九　國學者の業績

岩城準太郎

「獨り燈火の下に書をひろげて、見ぬ世の人を友とするこそ、こよなう慰むものなれ」とは、徒然草の名文句であるが、人間と人間とが、相互に肺肝を吐露して眞實に諒解するのは、言語・文章の媒介によるのである。まだ見ぬ世界の人と魂相通ずるを得るのは、卽ち「ふみ」のおかげである。

國と國と相知り、國民と國民とが相理解するのは、外交と貿易とによるばかりではない。相互に他の文章を讀むことによる。矯飾と辭令とを剝ぎ去つた赤裸の國民は、その創作するところの文學に最もよく活躍するからである。

一國の國民がその祖先と相面接する思をするのは、過去の

宿緣

古典

國民の書き遺した文學を讀む時である。父祖の遺文に接する時のなつかしさはいふまでもない。江戸時代の國民、鎌倉・室町時代の國民、平安時代の國民、更に溯つて上古・太古の國民の、その時代々々に創作した文學を繙く時こそ、本當に我が血脈の生々相繫がる宿緣を直感するのである。

古代國民の面影を髣髴しようとするには、直接古代國民の創作したものに當らねばならぬ。その思想を知り、その感情を解し、その生活に直面しようとするには、一意その遺文・遺作を味讀するに限る。我が國民の固有せる生活の眞相を、生き生きと今日の我等に見せてくれるのは、卽ち古典である、古文學である。

歳月の久しきに隨つて、遺文・遺作が亡びる。時代の古きに

典籍

風雨千歳の淘汰

隨つて、文筆の人が數少ない。歷史あつて以來三千年、上世に溯れば溯る程、典籍が稀になるのである。此の稀に存する古文學こそ、本當に貴重な古代の鏡である。祖先の面影を窺ふべき大切なフイルムである。之を書き遺した上世の文學者は、數多いその代の國民から、特に選び上げられた極めて少數の代辯者であつて、風雨千歳の淘汰を經て、今日に傳はつた古典は眞に天佑によつて生命を全うした稀代の珍寶である。

かう見てくると、古典の研究は、啻に古物いぢりの物ずきでないのみならず、學問の爲の學問と言ふ樣な暢氣なものでもない。必要だの不必要だのといふ理窟の問題でもない。實に、我等の衷心の要求からやむにやまれぬ感情の問題である。如上の意味において、自分は古典に對して限りない愛敬を捧

げ、探究の念を起すのである。此の點に著目し、此の如き見解から、古典の研究を開始したものは、卽ち我が國學者である。

國學者といふ名は可なり廣い意味に用ひられ、隨つて曖昧な意味に用ひられてゐる。國文學者・國語學者にも、國史學者・古典學者にも、神道家皇道家といふやうな方面にも用ひられてゐる。しかしこゝで國學者といふのは、國文學の創作家でもなく、國語の研究家でもなく、歷史家でもなく、また神道家でもない。すべてこれ等の一面を具へてはゐるが、その本領とするところは、國民的精神をもつて、固有の國民生活を闡明しようとするので、その根本資料として我が古典・古文學を研究する人々である。卽ち古典を通じて國民を見ようと努める學者である。

菅家遺誡　菅原道眞の教をその子孫が書き綴つたものといふ。

國學といふ言葉は、古く平安朝の文書「菅家遺誡」などに見えてゐるけれども、それは意味が違ふ。上述の意味の學風は、對外的に國民としての自覺が生じた後でなければ起らぬ。佛學あり、漢學あり、こゝに國學が起るので、漢學が漢土の道を講じ、佛學が佛教の道理を說くので、こゝに我が國の古道を闡明しようといふ要求が起る。神道の興起は、この要求と關係はあるが、近古時代の神道は、研究の方法を誤り、頭腦の向け方を知らなかつたから、まだ國學といふ特色的なものにはならなかつた。やつぱり學術的研究の實力が出來て來るのを待たねばならなかつた。

近世江戸時代になつて、學問が始めてその體裁をなして來た。漢學にも、佛學にも學者と名づくべき者が出て來た。特

荷田春滿　江戸時代の國學者、元文元年(二三九六)歿、年六十九。

啓文

契沖　攝津國(兵庫縣)の人、國學者、歌人、元祿十四年(二三六一)歿、年六十二。

賀茂眞淵　遠江國(靜岡縣)の人、國學者、明和六年(二四二九)歿、年七十三。

本居宣長　伊勢國(三重縣)の人、國學者、享和元年(二四六一)歿、年七十二。

に漢學の勢が盛んであつた。慶長年間漢學興隆の施設をなしてから約百年、これに刺激せられて國學も始めて現はれた。國學者なるものの出たのはそれからである。

國學の言葉を新しい意味に用ひたのは、荷田春滿だといはれてゐる。春滿は伏見稻荷の神官であつて、享保十三年、京都東山に學校を創立することを幕府に建議した。その啓文に始めて國學の語を用ひたのである。なほ啓文の中に「皇國之學」ともいひ「國家之學」ともいつて、すべて同じ意義に用ひてあるが、學校の名を國學校と出してあるのを見ると、國學といふ方が春滿の主として用ひようとした言葉と認めてよろしい。

此の意味での國學者は、萬治・寛文頃から、追々現はれて近く明治時代に及んでゐる。僧契沖・荷田春滿・賀茂眞淵・本居宣長・

平田篤胤
秋田の人、國學者、天保十四年(二五〇三)歿、年六十八。

啓蒙的研鑽

平田篤胤等は、その最も傑出した人物である。

これらの人々の忠實熱心な研究によつて、從來暗がりの中に放置せられてゐた古典が、漸次に究明せられ、我がなつかしい同胞國民の面影を、まのあたりに見るが如く感ずることが出來るやうになつた。今までは折角あの貴重な古典を有つてゐながら、言語解釋の困難であるがために、祖先の心胸に觸れることが出來なかつたが、これら學者は、先づ言語を討究し、傳説を説明し、歌謠を解釋し、史籍・物語等古典の全部に亙つて啓蒙的研鑽に力めたので、我等後生がどの位その餘澤に浴してゐるか計られない。我等は國學者の開いてくれた道に立つて遠い祖先への面接に急ぐ時、しみ〲有難さを感じて、その功業を讃美しないではゐられない。

(國文學の諸相)

かへら－ざら－め－や

二〇 すめらみくに

一 萬葉考のはじめにしるせる詞

賀茂眞淵

賀茂眞淵

いでや千いほ代にもかはらぬ天地(あめつち)に生ふる人、いにしへのこととても心ことばの外やはある。しかいにしへをおのが心ことばにならはし得たらむとき、身こそ後の世にあれ、心ことばは上つ代にかへらざらめや。世の中に生きとし生けるもの、心も聲もすべていにしへ今ちふことのなきを、人こそな

さかしら

二　書　古事記・日本書紀。

とほじろし

あを人ぐさ

らはしにつけさかしらによりて、異ざまになれるものなれば、たちかへらむこと何かかたからむ。　かくしつゝかの二書にあなる歌をもよく見、よく解きて後、たちかへり君が御代々のふみの八十くまおちず、神の御代のことをもさかのぼらひ見とほらふには、おのれしやがてその世々に在りて見聞きなしてむ。　しかありて上つ代のすめらみこと、内には皇神を崇みたまひ、外には嚴き大御稜威をふりおこしまして、まつろはぬ國をたひらげ、ちはやぶる人をやはしまし、あめつちにかなひてとほじろき道をなしたまひ治めたまひ、うつゆふのさきことをば見し直し聞し直しおはしましゝかば、あを人ぐさも皇神をゐやまひて心にきたなきくまをおかず、すべらぎをかしこみて身に犯せる罪もなく、ましして臣たちは海ゆかば水漬

天と長く

賀茂翁家集　五卷、賀茂眞淵の歌文集。

直毘　神直毘神。

くかばね、山ゆかば草むすかばね、大君のへにこそ死なめ、のどにはあらじと言だてて、をゝしきまごころをもてつかへまつれれば、あがすめらぎの御をす國を、天と長く地と平らけく聞しをせるゆゑよしをも、つばらに思ひ得つべし。　こを思ふに、すめらみくにの上つ代のことをしりとほらふわざは、ふるき世の歌をしるよりさきなるものはなかりけり。

（賀茂翁家集）

二　直毘靈

本居宣長

皇大御國は、かけまくも畏き神御祖天照大御神の御生れませる大御國にして、大御神、大御手に天つ璽を捧げ持たして、萬

ことよさす
谷蟆
まつろふ
さだ
てぶり

千秋の長秋に、吾御子のしろしめさむ國なりと、ことよさしたまへりしまに〳〵、天雲のむかぶすかぎり、谷蟆のさわたるきはみ、皇御孫命の大御食國とさだまりて、天の下にはあらぶる神もなく、まつろはぬ人もなく、千萬御世の御末の御代まで、天皇命はしも、大御神の御子とまし〳〵て、天つ神の御心を大御心として、神代も今とへだてなく、神ながら安國と、平らけくしろしめしける大御國になもありければ、古への大御世には、道といふ言擧もさらになかりき。そはたゞ物にゆく道こそありけれ、物のことわりあるべきすべ、萬の教ごとをしも、何の道くれの道といふことは、異國のさだなり。

然るをやゝ降りて書籍といふもの渡りまゐ來て、そを學びよむこと始まりて後、その國のてぶりをならひて、やゝ萬の上

青人草
さてこそ……來にけれ

にまじへ用ひらるる御代になりてぞ、大御國の古への大御てぶりをば、とりわけて神の道とはなづけられたりける。そはかの外國の道々にまがふゆゑに、神といひ、又かの名を借りて、こゝにも道とはいふなりけり。

しかありて御代々々を經るまゝに、いやます〳〵にその漢國のてぶりをしたひまねぶこと、盛りになりもてゆきつゝ、終に天の下しろしめす大御政も、もはら漢樣になりはてて、青人草の心までぞ、その意にうつりにける。さてこそ安けく平らけくてあり來し御國の、みだりがはしきこといできつゝ、異國にやゝ似たることも、後にはま

本居宣長

はふる

むた
ときはかきはに

じり來にけれ。

そも〳〵此の天地のあひだにありとあることは、こと〴〵に神の御心なる中に、禍津日神の御心のあらびはしも、せむすべなく、いとも悲しきわざにぞありける。然れども、天照大神高天原に大まし〳〵て、大御光はいさゝかも曇りまさず、この世を御照らしましまし、天津御璽はたはふれまさず傳はりまして、ことよさしたまひしまに〳〵、天の御孫命のしろしめして、天津日嗣の高御座は、あめつちのむた、ときはかきはに動く世なきぞ、この道の靈しく奇しく、異國の萬の道にすぐれて、正しき高き貴き徵なりける。

そもこの道は、いかなる道ぞと尋ぬるに、天地のおのづからなる道にもあらず、人の作れる道にもあらず、この道はしもかしこきや高御產巢日神の御靈によりて、神祖伊邪那岐大神・伊邪那美大神の始めたまひて、天照大御神の受けたまひたもちたまひ傳へたまふ道なり。　かれこゝをもて神の道とは申すぞかし。

さてその道の意はこの記をはじめ、もろ〳〵の古書どもをよく味はひみれば、今もいとよく知らるるを、世々のものしりびとどもの心も、みな禍津日神にまじこりて、たゞからぶみにのみ惑ひて思ひとおもひ、いひといふことは、みな佛と漢との意にして、まことの道のこゝろをば、えさとらずなもある。

かれおのが身々に受け行ふべき神の道の敎などいひて、くさぐさものすなるも、みなかく道々の敎へごとをうらやみて、近き世にかまへ出でたるわたくしごとなり。

あなかしこ、天皇の天の下しろしめす道を、下が下として、己がわたくしの物とせむことよ。人はみな産巣日神の御靈によりて、生まれつるまに〳〵、身にあるべきかぎりの行は、おのづから知りてよくするものにしあれば、いにしへの大御代には、下が下まで、たゞ天皇の大御心を心として、ひたぶるに大命をかしこみうやまひまつろひて、おほみうつくしみの御蔭にかくろひて、おの〳〵祖神を齋き祭りつゝ、ほど〳〵にあるべきかぎりのわざをして、穩しく樂しく世をわたらふほかなかりしかば、今はたその道といひて別に敎へを受けておこなふべきわざありなむや。

もししひて求むとならば、きたなきからぶみごころを祓ひきよめて、淸々しき御國ごころもて、古典どもをよく學びてよ。

直毘靈　一卷　本居宣長著、古事記傳第一卷記傳の序論。

しかせば、受け行ふべき道なきことは、おのづから知りてむ。そを知るぞ、すなはち神の道をうけおこなふにはありける。かゝれば、かくまで論ふも道の意にはあらねども、禍津日神のみしわざ、見つゝ默止えあらず、神直毘神・大直毘神の御靈たばりて、このまがをもて直さむとぞよ。

かくいふは、明和の八年といふ年の、かみな月の九日の日、伊勢國飯高郡の御民、平阿曾美宣長、かしこみかしこみしるす。

（古事記傳、直毘靈）

三　靈能眞柱

平田篤胤

此の身死りたらむ後に、わが魂の往方はとく定めおけり。

翁　本居宣長翁。

五月蠅なす

そは何處にといふに、なきがらは何處の土になりぬとも、魂は翁のもとに往かなむ。今年先立てる妻をもいざなひ、直に翔りものして翁の御前に侍ひをり、世に居るほどはおこたらむ歌の教へをうけたまはり、春は翁の植ゑ置かしし花をともども見たのしみ、夏は青山、秋は黄葉も月も見む、冬は雪見てのどやかにいやとことはに侍らなむ。かくて後の古學する徒に翁の靈を幸へまさば、篤胤すゑの教へ子なれば、兄たちをばわづらはさず、翁の御言をうけて申しつぎ、漢説に醜法師、そのほかあらゆる邪の道を説き弘めむと五月蠅なす穢き徒、かたはしより磐根木根をも蹈みさくみさくむが如く言向けしめ、またたま〳〵も大御國へ射向ひ奉る夷のありて、翁の御心いためまさば、この篤胤がまかり向ひ見て參り候はむと、しばし暇

靫

曾丹　曾根好忠のこと、平安時代の歌人。

をこひ申し、山室山の日蔭のかつらを襷にかけ、比々羅木の八尋の矛を右手に持ち、眞弓の弓を左手に執り、千箭入の靫をそびらに負ひ、八握の太刀を取佩きて、虚空かけり、神軍に集ひ入

平田篤胤

り、もとより尊き神々の、いかに汝はいやしきを、など集へぬに集ひたるなど宣ふとも、おのれ更に受けひき奉らず、この平の篤胤も神の御末胤にさむらふを、などさしも卑しめ給ふぞと、曾丹がさまには追離けられず、強して神軍の中に加はり、その御先鋒を仕へ奉りて、風日祈神宮より、かの神風をいぶき吹きなびけ給はむ圖をうかゞひ、やをれ、夷の頑たぶれ、辛き目見せ

山室山
山室にちとせの春の宿しめて風にしられぬ花をこそ見め　本居宣長

靈能眞柱　上下二卷、平田篤胤著。

むと雄たけびつゝ、賊の軍の中にかけ入りて、蟻の集へる奴ばらを、八尋の矛をふりかざし、かの燒鎌の敏鎌をもちて打ち掃ふことの如く、追ひしき追ひ伏せ、犬と家猪とのものつかせ、或はしや頭ひき拔きすて、蹴え散かし、うち罰め、山室山にかへり來て、老翁の命に復命まをしてなまし。あな、こゝろよきかも。

こは篤胤が常の志なり。あはれ、この予が言擧よ、さこそや人のこと〳〵しとや見るらむかし。しかはあれど、すべて人は心の安定をば太くいかめしく、底磐根に突きかため、雄々しく潔くとのみ力むべきものぞ。

（靈能眞柱）

附錄

上古・中古文學

編者

上古とは太古から奈良朝の末期までを含む。この時代は文化なほ未だ一般に徹底せず、外邦文化は移入せられたとはいへ、國民思想の根柢に深く影響を及ぼしたとも考へられない。固有の國民精神が最も眞率に文學の上に反映してゐたと見てよい時代である。この時代は、文學史上大體、天武・持統・文武三天皇の飛鳥朝を境界として、前後二期に分つことが出來よう。

「太初に道あり、道は神と偕にあり、道は神なり」と、ヘブライの

聖徒はいつたが、我等の祖先の間にも、またかうした思想はあつた。「神代よりいひつてけらく、そらみつ倭の國は皇神のいつくしき國、言靈のさきはふ國」と萬葉人の歌つてゐるのは、やがてそれである。要するに、言靈とは上代人が言語にあると信じた神祕性に外ならぬ。彼等は既に言靈を信じた。故にわれに敵對する仇人の上に災禍あれと願ふ時にも、また自他の上に吉祥を請來しようと欲する時にも、彼等はこれに縋つてその目的を達し得ると信じた。「のろひ」また「いのり」といふ語に共通する「のり」といふ語の意義に想到する時、そこに言靈の發動を見ることが出來る。

祝詞(のりと)こそは、この言靈の信仰が、祭祀と結びついて發達した文學である。即ちそれは國家的祭祀にあたつて敕命

を奉じて神祇に奏し、若しくは神前に集まつてゐる羣臣・神職等に讀み聞かせる祭神の詞で、その淵源は、祭祀の起源と共に、遠く有史以前に溯るべきものと考へられる。現存の祝詞は後世の筆錄にかゝるが故に、それは必ずしも原形のまゝだとは考へられないけれども、その性質上大體に於て古體を存してゐると信じてよからうし、ほゞ大寶令の前後には、今日のやうな祝詞は出來てゐたたらうと古人も考へてゐる。

神人交渉の文學である祝詞と竝んで、古代人の間にはまた、人々交渉の文學も生まれたことは自然の數である。それは即ち歌である。

歌は本邦文學史上最も重要な地位を占め、過去の殆どすべての文學はこれと何等かの點において相交渉せぬものはな

いといつてい〻。傳説によれば伊邪那岐・伊邪那美の二神が天の御柱を繞つて唱和し給うたのが、その濫觴だといふが、その當否はともかくも、かうした感情の高まりに於て自然に發せられた嘆聲が、自ら一種韻律的のひゞきをなすところに、歌の萌芽はあつたものではないだらうか。そして年月とともに漸次彫琢と錬磨とが加へられるに及んで、歌の形式が整正せられ、内容もます／＼藝術的に發展していつたものであらう。

古代人の心境は單純であるが故に、歌に於けるその感情の表現もまた幼稚であることを免れない。それと共に、また露骨であり、直截である。故に藝術としては完成の域を去ること遠きは已むを得ないところではあるけれども、それらはえ

もいはぬ迫力の伴なうてゐることも、また爭ふべからざる事實である。彼等の生活の中心は鬪爭と愛憐とであつた。しかもその歌ふところは勝利と陶醉とであつて、敗北と悲哀とはその内容でなかつたことも注意せらるべきである。

抑、本邦の古代には文字はなかつた。神代文字といふものの存在を高唱する學者もあつたが、その論據は漠として捉へどころのないものであつた。文字は多く三韓を通じて入つて來た支那文化の齎した賜物である。その傳來が果して何れの年であつたかは知り難いけれども、史上に明徴のあるのは、應神・仁徳二天皇以後である。しかし履中天皇の御宇に諸國に國史を置き給うた際にも、それに任ぜられた者は、歸化人であつたことに見ても、文字が邦人のものとなるまでには、か

なりの歳月を要したことは知られる。欽明天皇の朝に佛教が將來せられ、後になつて、文字は一般に親しまれるやうになつて來た。

支那及び印度の文化が傳來して歳月を經るにつれ、本邦の文化もまた異常の發展を見、諸般の制度・文物その面目を一新したかの觀があり、殊に美術・工藝の發達は驚異に値すべきものがある。しかもその文化の恩澤に浴する者も極めて狹い範圍に限られ、且つ外邦思想の影響も、多くは表面的にとゞまつて、内面的に深刻には及び得なかつたことは注意すべきである。

飛鳥朝から奈良朝に亙る約百年間に、本邦文學史は第一次の黄金時代を迎へたと見てよい。前期以來發達の道程を辿

つてゐた漢字の使用法は、本期に入つて益自由を極め、驚くべき巧妙の域に達した。かくて、そを驅使して前期の末頃から本期にかけて、幾多の述作がなされた事は想像するに難くない。その今日に殘されたものだけでも、史籍・地誌・詩集・歌集等數十卷に及んでゐる。盛んなりと謂つてよい。今、その代表的の二者を語らう。

その第一は、古事記である。天武天皇は諸家齎すところの帝紀及び本辭の多く虚僞を加へてゐることをなげかせられて、修史の事を起し給うたが、天皇の崩御と共に、御雄志も中道にして頓挫したのを、元明天皇がその御志を紹いで太安麿をして撰録せしめ給うたのが、本書である。かくてその中核をなす主題は、皇室を中心として國家組織を闡明しようとする

點にある。大和民族の發生から民族闘爭へ、そしてやがて國家の統一へ、かくて、我が大和朝廷の稜威の四海に光被するに至つた徑路を明らかにせんが爲に、神話・傳說を經とし、史實を緯とし、遊離說話を以てその間を點綴して、一大敍事詩が展開して行くところに、神典として以外に、古事記の文學的價値が存するのである。

その第二は、萬葉集の結集である。萬葉集二十卷四千五百首の長短歌こそは、この期に發達した歌の總集である。誰がいつの世にこれを集めたかは、なほ定說がない。今、本集の歌を見るに、前代の歌は殆どすべて作家の生活に卽した主觀詩であつたが、當代の作家は、その眞率な情感を歌ふとともに、自然を靜觀する餘裕をも生じ、また極めて少數ながら深く人生

を省察する者さへも出るに至つた。これ明らかに漢詩文や佛教思想に影響せられたところであつた。なほ長歌に伴なふ反歌、さては應詔・題詠等の作の盛んに行はれたことなども、大陸の文學から被つた影響であつた。

この時代の歌は、ほゞ天平時代を境として、前後二期に分けることが出來る。前期に於ては、まづ持統・文武二天皇の朝に出た柿本人麿が偉大な作家として數へられる。彼に次いで天平の初年まで生存してゐた山邊赤人また、彼と相如く聲價を得てゐる。しかもこの二家は全く作風を異にし、前者が抒情的作風を以て當代に獨步してゐるに對して、後者は敍景的作品を以て優秀な地步を占める。その他山上憶良・大伴旅人等またこの二者に多く讓らぬ特色ある作品を後代に遺して

ゐる。如上の作家羣の世を去つた後に來るのが後期で、その中心作家は大伴家持であつたが、要するに前期に於てほゞ完成の域に達した作風を、後期の作家達はたゞ迹づけてのみ行くかの觀がある。併し、この時代の歌が今日に遺されたのは、彼等の努力に俟つものが多かつたといつてよい。

桓武天皇の平安奠都から源頼朝の鎌倉幕府開設に至る約四百年を、こゝに中古と名づける。平城京から平安京へ都が遷つて、前代の權門は多く失脚し、獨り榮えたのは北家藤原氏である。この時代の文學は藤原氏と共に終始してゐる。即ち藤原氏の基礎が確立した清和天皇の朝に復興の曙光を見、その威勢漸く加はり、次いでその最高潮に達した醍醐天皇から後一條天皇の御宇にかけて、文學またその姸を競ひ、爾後衰

頽の運を辿りつゝ、院政時代に入つては、殆ど强弩の末勢の悲哀を見せて、次代へと推移してゆくのである。

前後四百年、その間、武を邊境に用ひたことも一再ではなかつたが、都人士はひたぶるの太平を樂しんだ。上代樸野の風は銷磨せられて、文雅の風は滿朝に及んだ。しかも庶民に至つては文化の餘澤にすら霑ふことが出來ず、永へに社會の下層に沈淪して、貴族の頤使に甘んじてゐなければならなかつた。

かくて當代の文學は徹頭徹尾貴族の文學であつた。

政權を私した彼等には、家門の繁榮のためには、何物をも犧牲に供して顧みない。阿附迎合・黨同伐異は彼等を繞る殆どすべてである。そしてその日常は煩瑣な儀禮と、それに附隨して管絃の演奏と詩歌の贈答とばかりであり、その多くは徹

底した眞劍味を缺いた遊戲的なものであつた。

當代の人士はまた佛教にも多大な關心を有つてゐた。南都の佛教は衰へて、それに代つたものは最澄・空海によつて將來せられた顯密二教であつたが、その事とするところは國利民福の大から、治病安產の小に至るまで、多く現世の利益に係つてゐたが故に、事相の隆昌はあれど、教相の研究は寧ろ忽諸に附せられたるかの觀があり、僧侶等また權門に阿附して、その庇護の下に世間的榮華を貪る者多く、人心の祕奧に深き影を投ずることはまだ認め難かつた。

既に述べたやうに、當代の初頭、文壇に勢を張つてゐたものは漢詩文であつた。漢詩文は、近江朝頃から漸く盛大となる機運に向ひ、奈良朝時代に於て、かなり廣く行はれたが、その甚

だしく隆盛を極めたのは、嵯峨・淳和兩天皇の御宇であらう。上に英邁嵯峨天皇おはしまし、下に英才空海・篁等出でて新京の文運は實に惠まれたものがあつたと稱してよい。詩集また前代に出た懷風藻に次いで、弘仁・天長の御代に、凌雲・文華秀麗・經國の三集の敕撰をさへ見た。

しかし、漢詩文は到底外邦の詩である。衷心の感懷は、これを盛るに外國の言語・外國の詩形を以てすることの不自然であることは言を俟たない。かゝる情勢の中に、多年漢詩文に抑壓せられて來た和歌の、再び擡頭すべき機運が釀成せられつゝあつたのである。かくて遂に六歌仙の時代が歌の歴史の上に來たのである。六歌仙の時代とは、清和天皇から宇多天皇に至る時代を包含すると見てよい。奈良朝の末期から

雌伏してゐたとはいへ、一歩々々力強き歩みをつゞけて來た歌が、再び表面に現はれた時には、萬葉集の歌に比べて甚だしく纖細にして優麗な趣致を帶びてゐたことを感じる。在原業平・僧正遍昭・小野小町などは文學史に特殊の光彩を放つ作者である。

なほ國文學の振興に與つて力あるものは假名文字の發達である。漢字を假りて國音を寫さうとしたのが假名の起源で、その源流は、現存の資料を以てしても、尚且つ遠く推古天皇の御宇に溯ることが出來る。しかし、全く漢字の原形から離れて國字の體をなしたのは、ほゞ當代の初期であつたと考へられる。殊に草假名に見られる流麗さこそは、恐らく中古の國文學を通じて流れる氣分を最もよく象徴するものであら

う。

假名文字の制作と共に發達したものは、散文の文學である。古事記は敍事詩の上乘なものではあるが、今日ではその全部を正確に當時の言語もて讀むことは、恐らくは不可能のことであらう。眞にその時代の國語もて書かれた散文の文學は、中古期に入つて始めて出たといふも、必ずしも誣言ではない。現存の竹取物語は、その意味で本邦最古の散文の文學と稱してよい。竹取物語は多分に童話味を帶びた興味ある物語で、佛典や神仙譚などに影響せられたこと多大である。これと竝んで當代のものと考へられる作に伊勢物語がある。彼が一貫せる構想の上に立つ傳奇であるに對して、これは個々の歌に關聯せる小話を集めて、その大部分が同一の主人公を共

有してゐるといふにとゞまる、所謂歌物語である。そしてこの二種の物語は、後に續出する物語への歸趨を暗示してゐる點に於て、特に價値多いものである。

平安朝の初期から宇多天皇の御宇までは、要するに次いで來るべき黃金時代に對する準備時代であつた。寛平六年菅原道眞の奏請によつて、遣唐使が廢止せられた事は、邦人が漸く大陸文化から離れて、獨自の道に進むよき機會を與へたと考へられる。その前後から從來鵜呑みにして來た大陸文化は咀嚼せられ、消化せられて、日本化せられた事は、生活樣式の上に、美術・工藝の上に、明らかに看取する事が出來るが、文學の上にも、また同樣の情勢が見られる。醍醐天皇の御代から後三條天皇の御代頃まで、約二百年を平安朝文學の最盛期とす

る。この二百年を前後二期に分けて考へると、延喜・天曆を中心とする約百年は歌の時代であり、道長時代を中心とする約百年は物語の時代である。

歌の時代はまづ古今和歌集の撰進に始まる。撰者の一人なる紀貫之が書いたといはれる序文は、實に彼の抱負を窺ふべき大文字である。劈頭まづ「やまとうたは人のこゝろをたねとして、よろづのことのはとぞなれりける」といつた「やまとうた」といつたところに、明らかに漢詩に對抗して歌の地位を確保しようとした意氣が燃えてゐるやうに思ふ。從來漢詩に對して甚だしき卑下を感じてゐたであらう歌の地位は、ここに彼と少なくとも對等のものとなつた。詩の六義を歌に固有のものであるかについて「からのうたにもかくぞあるべ

き」といつたのは、稚氣滿々たる表現ではあるが、これまた已むに已まれぬ作者胸奥の不平の迸りと見れば、深く咎めるには及ばないであらう。　とにかく、本集敕撰の事によつて、歌は從來の漢詩の地位にとつて代はる事となり、爾後數百年に亙る歌集敕撰の基をなしたのである。　たゞその歌は上代に見る樣な眞率さは失せて、著しく思惟的・理智的な傾向が現はれて來たけれども、大體に於て典雅・純正な抒情詩が完成せられて、後代の歌人の進み行くべき道が擧示せられたのであつた。

御堂殿の代を中心とする物語の時代も、一朝にして成つたものではなかつた。　竹取物語の後、物語の製作が相次いだことは、諸書に散見する書名を見て知ることが出來るが、現存の宇津保・落窪等の物語に見て、そこに著しく寫實味の加はつて

來たことが注意せられよう。　また日記と名づけて、我が過ぎし方の追憶をものすることも行はれたが、これらは日記とはいへ、甚だ物語風な、所謂私小説に類する作品である。　これらいろ〳〵の作品の後をうけ、それらの要素が合して一になつたところに、源氏物語が生まれ出るのである。

源氏物語が紫式部の作であることは定說である。　恐らくあの大作が、一時に出來たとは信じられないが、一條天皇の寛弘年間には、少なくともその一部分は、宮廷の間に行はれてゐたことは確かである。　この物語は大體二部に分つことが出來る。　卽ちその第一部は前四十一帖で、光源氏君を主人公とし、第二部は後十三帖で、光君の子薫大將を主人公としてゐる。　さて、この作者の意圖がいづれにあつたかは、古來學者の論議

の種となつてゐるところではあるが、讀者をして、あるがまゝの平安朝貴族の生活はかくもあつたらうと首肯せしめるところ、作者の寫實的筆致は驚くべきものがある。その描寫は微に入り細を極めて、情・景二つながら生動し、人物の性格もほぼ書き別けられ、事件の推移も、極めて自然である。約千年の昔に一巾幗の手に、かくの如き大作が成されたことは、實に世界文學史上の一大驚異である。

源氏物語と竝んで平安朝文學の一傑作は枕草子である。清少納言のものした隨筆であるが、その犀利な觀察と冷徹な批判とを、作者獨自の文章をもて行つたところ、何人もたやすく企及し得ない才筆で、永く國文學史上の珠玉として、光彩を放つべき作品である。

源氏物語以後、小說の書かれたものは數多かつたけれども、その多くは源氏の糟粕を嘗めるもののみで、見るに足るべきものは少ない。彼等の中には徒らに筋の運びに怪奇を求めてやまず、遂には甚だしき不自然をも顧みないものさへ出るに至つた。

さしもに榮華を極めた藤原氏も、御堂殿の世を限りとして、一路凋落の道を辿つて行つたが、白河天皇が院中に政を聽き給ふに及んで、ます／＼その勢を弱め、名は昔ながらに攝關といひ、大臣といふと雖も、たゞ虚器を擁するに止まつてゐた。しかも藤原氏に代るべき新勢力はまだ現はれない。過去の盛時をなつかしむ情は、大鏡・榮華物語等歴史物語を生じ、また次の時代に興るべき說話文學の先蹤として、今昔物語集が集

められた。しかし、これらのものより文壇的に注目すべきことは、歌がやゝ活氣を帶びたことと、歌論が勃興したこととである。

歌は古今集を宗として、その歌風を踏襲するばかりで、單調な生活から詠み出される作は、殆ど變化なく、萎靡沈衰の狀にあり、圓融天皇の御代に、曾根好忠がその語彙の上に一道の清新味を加へようとしたのですら、時流からは狂を以て目せられた。一條天皇の御宇は、文學的に惠まれた時代であり、歌に於ても幾多の優れた作家が輩出したが、和泉式部等少數者を除いては特記すべきものがない。かく行き詰まつた歌壇は、いつかは轉回せざるを得ない。その轉回の傾向を窺ふべきものは金葉集である。しかも歌壇の本流は、なほ依然として

舊に由つてゐるので、外觀こそ頗る盛大には見えるけれども、實質的には頗る索漠たるものがあつた。

製作のあるところに評論の伴なふのは必然の數である。本邦の評論史は、その當初に於ては歌論史であつた。歌が特にその對象となつたのは、歌が最も尊重せられてゐたからである。所謂四家式がどの程度まで信ずべきかは措いて問はぬ。たゞ歌論の濫觴を奈良朝まで溯り、こゝにも亦支那文學の影響の否めないのは事實である。かくて古今集序以後、歌合の盛行につれて歌論はます／＼行はれ、その結果は歌壇にも黨同伐異の傾向が現はれ、源俊頼と藤原基俊とは、新舊二派を代表してゐたかに見える。またこの二派の間に介在して、藤原清輔も亦父祖三代の家學を繼承して、後に歌道に門閥を生

じる基をなした。かく諸家の風混沌として、歌壇はその適歸するところに迷うてゐた時に出たのが、藤原俊成であつた。彼は新舊兩派の門を敲き、諸流の風を涉獵し、これを折衷して、こゝに中正にして優雅な歌風を興した。その成果はこれを後白河法皇の院宣によつて、彼が撰進した千載和歌集に窺ふことが出來る。この集は中古時代の掉尾を飾る寶玉であると共に、やがて來るべき歌壇に對する示唆である點に於て、特に重要視せらるべきである。

新制　新日本讀本　巻十　終

常用漢字

（大正十二年五月臨時國語調査會發表、昭和六年五月修正）（千八百五十八字）

【一】一丁七丈三上下不
世丙並
【丨】中
【丶】丸主
【丿】之久乏乘
【乙】乙九乞也乳亂
【亅】了事
【二】二互五井
【亠】亡交亦京亭
【人】人仁仇今介仕他付
代令以仰仲件任伊伏伐
休伯伴伸伺似位低住佐
何余佳佛作使來例侍供
依侮侯侵便係促俊俗保
俠信修俱俳俵俸倉個倍
倒候借倫倂假偉偏停健

側偶傍傑備催傳債傷傾
僅働像僚僞僧價儀億儉
償優
【儿】元兄充兆兇先光克
免兎兒
【入】入內全兩
【八】八公六共兵其具典
兼
【冂】冊再
【冖】冗
【冫】冬冷凉准凌凍
【几】凡
【凵】凶出
【刀】刀刄分切刊刑列初
判別利到制刷券刺刻則
削前剛副剩割創劇劍劑

【力】力功加劣助努効勅
勇勉動勘務勝勞募勢勤
勳勵勸
【勹】包
【匕】化北
【匚】區
【十】十千升午半卑卒卓
協南博
【卜】占
【卩】印危却卵卷卽
【厂】厄厘厚原厭
【厶】去參
【又】及友反叔取受
【口】口古句叫召可史右
司各合吉同名后吏吐向
君吟否含呈吸吹告咸周

味呼命和咽哀品員哲唐
唯唱商問啓善喉喜喪喫
單嗣嘉器噴嚴囑
【囗】囚四回因困固國圍
園圓圖團
【土】土在地坂均坊坑坪
垂型埋城域執培基堀堂
堅堤堪報場塔塗塵境墓
塀增墨墮壁壇壓壞
【士】士壯壹壽
【夂】夏
【夕】夕外多夜夢
【大】大天太夫央失奇奉
奏契奔奢奧奪奬奮
【女】女奴好如妃妊妥妙
妨妹妻姉始姑姓委姦姪

姬姻姿威娘娛娠娼婚婦
婿媒嫁嫡嫌孃
【子】子字存孝季孤孫學
【宀】宅守安宏完宗官定
宜客宣室宮害宴家容宿
寄密富寒察寢實審寫寬
寶
【寸】寸寺封射將專尉尊
尋對導
【小】小少尙
【尢】就
【尸】尺尼尾尿局居屆屈
屋展層履屬
【山】山岡岩岳岸峠峯島
峽崇崎崩
【巛】川州巡巢
【工】工左巧巨差
【己】己

【巾】市布帆希帝帥師席
帳帶常帽幅幕幣
【干】干平年幸幹
【幺】幻幼幾
【广】床序底店府度座庫
庭庶康廉廊廢廣廳
【廴】延廷建廻
【廾】弄弊
【弋】式
【弓】弓弔引弟弱張強彈
【彡】形彩彫影彰
【彳】役彼往征待律後徐
徑徒得從御復微徵德徹
【心】心必忌忍志忘忙忠
快念怒思怠急性怨怪怯
恐恥恨恩恭息悔悟悖患
悲惟悼情惑惜惠惡惰惱
想愁愉意愚愛感慈態慕

慘慢愼慣慨慮慰慶慾憂
憐憚憲憶憾憤懇應懲懷
懸戀
【戈】成我戒戰戲戴
【戶】戶戾房所扇
【手】手才打扱扶批承技
抑投抗折抱抵押披抽拂
拍拒拓拔拘拙招拜括拳
拾持指振捕捧描捨掃授
掌排掛採探控推揚接提
換握揷揭揮援損搖搜摘
携摩撫擇擊操擔據擬擴
攝
【支】支
【攴】收改攻放政故敍教
敏救敗敢散敬敵敷數整
【文】文
【斗】斗料斜

【斤】斤斥斬新斷斯
【方】方施旋旅族旗
【无】既
【日】日旦旨早旬旭昇昌
明易昔星春昭昨是映時
晚晝普景晴晶智暇暖暗
暑暮暴曆曇曜
【曰】曲更書曹曾替最會
【月】月有朋服朕朗望朝
期
【木】木未末本札朱机朽
杉材村束柿杯東松板枕
林枚果枝枯架柄某染柔
査柩柱柳栗校株根格栽
桃案桐桑梅條梨械棄棋
棒棟森棺植楠業極榮構
概樂樓標樞模樣樹橋機
橫檄檢櫻欄權

【欠】次欲款欺歌歎歐歡
【止】止正此步武歲歷歸
【歹】死殊殉殖殘
【殳】段殺殿毀
【毋】母每毒
【比】比
【毛】毛
【氏】氏民
【气】氣
【水】水氷永汁求汗汚江
池決汽沈沒沖沙汰河沸
油治沼沿況泉泊法波泣
泥注泰泳洋洗津洪活派
流浦浪浮浴海浸消涉液
淑淚淡淨淫深混淸淺添
減淵渡溫測港渴湖湧湯
源準溢溶溺滅滋滑滯滴
滿漁漂漆漏演漕漠漢漫

漸潔潛潮澤激濁濃濕濟
濱瀧灣
【火】火灰災炊炎炭烈無
然煉煮煙照煩熟熱燃燈
燒營爆爐
【爪】爪爭爲爵
【父】父
【爻】爾
【片】片版牌
【牙】牙
【牛】牛牧物牲特犧
【犬】犬犯狀狂狩狹猛猫
猶獄獨獲獵獻
【玄】玄率
【玉】玉王玩珍珠班現球
理琴環璽
【瓦】瓦瓶
【甘】甘甚

【生】生產甥
【用】用
【田】田由甲申男町界畏
畑畜畝略番畫異留當疊
【疋】疎疑
【疒】疫疲疾病症痘痛痢
療癖
【癶】登發
【白】白百的皆皇
【皮】皮
【皿】皿盆益盛盜盟盡監
盤
【目】目盲直相省眉看眞
眠眼着睡督
【矢】矢知短
【石】石砂砲破研硬硯碁
碎碑確磁磨礎
【示】示社祈祕祖祝神票

祭禁禍福禦禮
【禾】秀私秋科秒租秩移
稅程稚種稱稻稿穀積穗
穩
【穴】穴究空突窃窒窓窮
【立】立章童端競
【竹】竹竿笑笛符第筆等
筋筒答策算管箱節範築
篤簡簿籍
【米】米粉粒粘粗粹精糖
糞
【糸】系紀約紅紋納純紙
級紛素紡索紫累細紳紹
紺終組結絕絡給統絲絹
經綠維綱網綴綻綿緊緒
線締緣編緩緯練縛縣縫
縮縱總績繁織繕繪繭繰
繼續

【缶】缺
【网】罪置署罰罵罷羅
【羊】羊美羣義
【羽】羽翁翌習翼
【老】老考者
【而】耐
【耒】耕
【耳】耳聖聞聯聲職聽
【聿】肅肇
【肉】肉肯肝股肥肩育肺
胃背胎胞胴胸能脅脈脊
脚脫腐腕腦腰腸腹膚膜
膝膽臆臂臟
【臣】臣臥臨
【自】自臭
【至】至致臺
【臼】與興舉舊
【舌】舌舍

【舛】舞
【舟】舟航般舵舶船艦
【艮】良
【色】色
【艸】芝花芽芳苑苗若苦
英茂茶草荒荷莊菊菌菓
荼華萬落葉著葬蒙蒸蓄
蔓薄藏藝藤藥
【虍】虎虐處虛號
【虫】蚊蛇蛙蜂蜜融蟲蠶
蠻
【血】血衆
【行】行術街衝衞
【衣】衣表衰袋袖被裁裂
裏裕補裝裸製複褒襲
【襾】西要覆
【見】見規視親覺覽觀
【角】角解觸

【言】言訂計討訓託記訟
訪設許訴診詐詔評詞詠
試詩詰話詳誇誌認誓誕
誘語誠誤說課調談請論
諭諸諾謀謁諮講謝謠謹
謬證識譜警譯議護譽讀
變讓
【谷】谷
【豆】豆豐
【豕】豚象豪豫
【貝】貝貞負財貧貨販貫
責貯貳貴買貸費貿賀賃
賄資賊賓賜賞賢賣賤賦
質賴購贈贊
【赤】赤
【走】走赴起超越趣
【足】足距跡路踊躍
【身】身

【車】車軌軍軒軟軸較載
輕輩輪輯輸輿轉
【辛】辛辨辭辯
【辰】辰農
【辵】込迎近返迫迭述迷
追退送逃逆透逐途通速
造連週進逸遂遇遊運過
道達違遙遞遠遣適遭遲
遷選遺避還邊遵
【邑】邦邪邸郊郎郡部郵
都鄉
【酉】酌配酒酢酬酷酸醉
醜醫
【釆】釋
【里】里重野量
【金】金釜針釣鈍鈴鉛鉢
銀銃銅銘銳鋒鋼錯錄錢
鍋鎖鎭鏡鑄鐘鐵鑑鑛

【長】長
【門】門閉開閑間閣閱關
【阜】防附降限陛院陣除
陪陳陰陵陶陷陸陽隆隊
階隔隙際障隣隨險隱
【隹】隻雀雄雅集雇雌雙
雜離難
【雨】雨雪雲零雷電需震
霜霧露靈
【靑】靑靜
【非】非

【面】面
【革】革靴
【音】音響
【頁】頂項順頓預頑領頭
頻題額顏願顚類顧顯
【風】風
【飛】飛飜
【食】食飢飲飯飾養餓餘
餠館餐
【首】首
【香】香

【馬】馬馳駁駄駐騎騰騷
驅驗驚驛
【骨】骨髓體
【高】高
【髟】髮
【鬥】鬪
【鬼】鬼魂魔
【魚】魚鮮鯉鯛
【鳥】鳥鳩鳴鶴鷄
【鹵】鹽
【鹿】鹿麗

【麥】麥
【麻】麻
【黃】黃
【黑】黑默點黨
【鼓】鼓
【鼻】鼻
【齊】齋
【齒】齒齡
【龍】龍
【龜】龜

注意

（一）本表にない漢字は假名で書くこと
（二）固有名詞には本表にない文字を用ひても差支ない、ただし外國（支那を除く）の人名地名は假名書とすること
（三）代名詞・副詞・接續詞・感動詞・助動詞および助詞はなるべく假名で書くこと
（四）外來語は假名で書くこと。

日本文學要覽

（新制新日本讀本附錄）

近世文學

	前期	後期
國學	細川幽齋　詠歌大概抄　耳底記 木下長嘯　擧白集 北村季吟　源氏物語湖月抄　枕草子春曙抄　八代集抄 戸田茂睡　梨本集 下河邊長流 僧契沖　漫吟集（歌集）　萬葉代匠記 荷田春滿　萬葉集童蒙抄　伊勢物語童子問	賀茂眞淵　萬葉考　冠辭考　縣居歌集 本居宣長　石上私淑言　玉勝間　古事記傳 加藤千蔭　萬葉集略解　うけらが花 村田春海　琴後集 清水濱臣　泊洦舍集 小澤蘆庵　六帖詠草 伴蒿蹊 平田篤胤　古史成文　古史徵　靈能眞柱 松平定信　花月草紙
狂歌	石田未得　吾吟我集 生白庵行風　古今夷曲集　後撰夷曲集 鯛屋貞柳　家土產 栗柯亭木端 桃縁齋貞佐	朱樂菅公 四方赤良 唐衣橘州 元木阿彌 鹿都部眞顏 宿屋飯盛 馬場金埒 頭光 （川柳） 柄井川柳 國學 （和歌） 香川景樹　桂園一枝 熊谷直好 木下幸文 八田知紀 橘曙覽　志濃夫廼舍集 僧良寛 平賀元義
俳諧	松永貞德　御傘　淀川 西山宗因　釋敎百韻　西翁十百韻 井原西鶴 小西來山 上島鬼貫　ひとりごと 松尾芭蕉　奥の細道　嵯峨日記 榎本其角 服部嵐雪 向井去來 森川許六 各務支考	横井也有　鶉衣 炭太祇 與謝蕪村　新花摘 大島蓼太 加藤曉台 高桑闌更 三浦樗良 加舍白雄 小林一茶　我春集　おらが春 大伴大江丸 成田蒼虬 櫻井梅室
物語・小說	小瀨甫庵　信長記　太閤記 三浦淨心　北條五代記 如儡子　可笑記 淺井了意　東海道名所記 安樂庵策傳　醒睡笑 鈴木正三　二人比丘尼 井原西鶴　武道傳來記　世間胸算用　日本永代藏 北條團水　新武道往來記　新永代藏	上田秋成　雨月物語 建部綾足 平賀源內 山東京傳 瀧澤馬琴　俊寬僧都物語　南總里見八犬傳　朝日奈巡島記 十返舍一九　東海道中膝栗毛 式亭三馬　浮世風呂 柳亭種彥 爲永春水
淨瑠璃	近松門左衞門　國性爺合戰　曾我會稽山　天網島　冥途の飛脚 紀海音 西澤一風 竹田出雲　菅原傳授手習鑑　義經千本櫻　假名手本忠臣藏	近松半二　伊賀越道中双六 福內鬼外　神靈矢口渡

近代文學

小說	矢野龍溪　經國美談 東海散士　佳人奇遇 末廣鐵腸　雪中梅
日記・紀行	樋口一葉　若葉かげ 國木田獨步　欺かざるの記 川上眉山　ふところ日記
和歌	落合直文　萩酒屋家集 正岡子規　竹の里歌 與謝野鐵寬　東西南北
俳句	正岡子規　春夏秋冬　子規句集 河東碧梧桐　日本俳句抄　新傾向句集
新體詩	外山山等　新體詩抄 落合直文　孝女白菊の歌 島崎藤村　若菜集
戲曲	坪內逍遙　桐一葉　（沓手鳥孤城落月）　牧の方　（日蓮上人辻說法）
隨筆	大和田建樹　雪月花 德富蘆花　自然と人生 國木田獨步　武藏野
評論	坪內逍遙　小說神髓 高山樗牛　ニイチエ　美的生活論 島村抱月

近代文學

（明治・大正・昭和時代）

小說

- 矢野龍溪　經國美談
- 東海散士　佳人奇遇
- 末廣鐵腸　雪中梅
- 長谷川二葉亭　浮雲
- 幸田露伴　五重塔
- 森鷗外　うたかたの記　舞姬
- 高山樗牛　瀧口入道
- 樋口一葉　たけくらべ　獨り江　十三夜
- 尾崎紅葉　金色夜叉
- 德富蘆花　不如歸
- 泉鏡花　高野聖
- 島崎藤村　破戒　春
- 國木田獨步　運命論者　牛肉と馬鈴薯
- 田山花袋　蒲團　生　妻
- 夏目漱石　(我輩は猫である)　草枕　虞美人草
- 永井荷風　ふらんす物語
- 長谷川二葉亭　平凡

日記・紀行

- 樋口一葉　若葉かげ
- 國木田獨步　欺かざるの記
- 川上眉山　ふところ日記
- 夏目漱石　滿韓ところどころ
- 河東碧梧桐　三千里
- 芥川龍之介　支那遊記
- 柳田國男　雪國の春

小說

- 長塚節　土
- 島崎藤村　新生　夜明け前
- 森鷗外　高瀬舟
- 有島武郎　宣言
- 志賀直哉　暗夜行路
- 谷崎潤一郎
- 吉田絃二郎
- 武者小路實篤
- 菊池寛
- 里見弴
- 芥川龍之介

和歌

- 落合直文　萩迺屋家集
- 正岡子規　竹の里歌
- 與謝野鐵寬　東西南北　天地玄黃
- 與謝野晶子　みだれ髪　小扇
- 佐佐木信綱　思草　新月
- 長塚節　長塚節選集
- 伊藤左千夫　伊藤左千夫選集
- 島木赤彥　氷魚　太虛集　柿蔭集　歌道小見
- 金子薫園
- 若山牧水　死か藝術か　山櫻の歌
- 尾上柴舟
- 石川啄木　啄木歌集
- 齋藤茂吉　赤光　あらたま

俳句

- 正岡子規　春夏秋冬　子規句集
- 河東碧梧桐　日本俳句抄　新傾向句集
- 高濱虛子　新春夏秋冬
- 內藤鳴雪　鳴雪句集
- 尾崎紅葉
- 夏目漱石　漱石俳句集
- 沼波瓊音　蕉風
- 松瀨青々
- 青木月斗
- 荻原井泉水

新體詩

- 外山山等　新體詩抄
- 落合直文　孝女白菊の歌
- 島崎藤村　若菜集　一葉舟　夏草　落梅集
- 土井晚翠　天地有情
- 上田敏　海潮音
- 薄田泣菫　白羊宮
- 北原白秋　邪宗門　廢園
- 石川啄木
- 國木田獨步
- 川路柳虹
- 河井醉茗　醉茗詩集　無絃琴
- 蒲原有明　有明集
- 千家元麿
- 萩原朔太郎　月に吠える
- 三木露風
- 西條八十

戲曲

- 坪內逍遙　桐一葉　(沓手鳥孤城落月)　牧の方　(日蓮上人辻說法)　新曲浦島
- 岡本綺堂　修善寺物語
- 中村吉藏　井伊大老の死
- 菊池寛
- 久米正雄

隨筆

- 大和田建樹　雪月花
- 德富蘆花　自然と人生
- 國木田獨步　武藏野
- 綱島梁川　病間錄
- 正岡子規　仰臥漫錄　墨汁一滴
- 幸田露伴　潮待草
- 落合直文　萩の家遺稿
- 大町桂月　筆のしづく
- 芳賀矢一　筆のまに〳〵
- 永井荷風　斷腸亭雜藁
- 和辻哲郎　偶像再興
- 姉崎正治　光あれ
- 阿部次郎　三太郎の日記
- 吉田絃二郎　小鳥の來る日
- 北原白秋　洗心雜話
- 島崎藤村　飯倉だより　春を待ちつゝ
- 吉村冬彥　冬彥集　藪柑子集
- 鶴見祐輔　三都物語
- 德富蘇峰　靜思餘錄
- 安倍能成　山中雜記

評論

- 坪內逍遙　小說神髓
- 高山樗牛　ニイチェ　美的生活論
- 島村抱月　(囚はれたる文藝)
- 廚川白村　近代文學十講　文藝思潮論
- 夏目漱石　文學論
- 松浦一　文學の本質
- 正宗白鳥　現代文藝評論

隨筆

- 佐佐木信綱　旅と歌と　竹柏集
- 薄田泣菫　草木蟲魚　茶話抄
- 土崎善麿　文藝遊狂

文部省檢定濟

昭和十三年一月十七日　中學校國語漢文科用・實業學校國語科用

昭和十二年七月十五日印刷
昭和十二年七月二十五日發行
昭和十二年十二月十八日訂正再版印刷
昭和十二年十二月二十六日訂正再版發行

新制新日本讀本
定價 各巻 金六拾錢

著者　吉澤義則

發行者兼印刷者　東京市神田區神保町一丁目二十五番地
合資會社 東京修文館
代表者 鈴木金之助

發行者　大阪市東區博勞町五丁目五十六番地
株式會社 修文館
代表者 鈴木常松

發兌
東京市神田區神保町一丁目二十五番地
振替口座東京二六四四番
合資會社 東京修文館

大阪市東區博勞町五丁目五十六番地
振替口座大阪四七一番
株式會社 修文館

第五学年二組
多賀英夫